紀　　要

創　刊　号

《自　然　部　門》

1991年3月20日

茅野市八ヶ岳総合博物館

紀　要　創刊号　1991年3月20日

編集発行　茅野市八ヶ岳総合博物館
〒391 長野県茅野市豊平6983番地
TEL 0266 (73) 0300
FAX 0266 (72) 6119

自　然　部　門

目　　次

茅野市八ヶ岳総合博物館紀要1：2－10（1991）

八ヶ岳諏訪側のキキョウ科ツリガネニンジン属の分布について

阿　部　義　男*

1．はじめに

八ヶ岳地域は，本州中央を南北に延びる八ヶ岳連峰を中心に，その山麓一帯を含む広範囲の地域である。長野県東部に位置し，標高2,899 mの赤岳を最高峰に，釜無川や千曲川沿いの標高 700m台の沖積地に及んでいて，地質的には，第三紀中期の富士火山帯の火山活動による火山岩と火山墳出物で覆われている。

冬は積雪量・降水量とも少なく，夏は気温の上昇が著しく降水量が多い。いわゆる表日本型の内陸性気候条件にある。

標高 1,500m前後以低の低山帯は，その大部分をカラマツ植林が占め，ブナの生育は皆無に近い現状で，自然度の高い夏緑広葉樹林が少ない状態である。

標高 1,000m付近以上になると，夏緑広葉樹林はカバノキ層の高木を多く混じえ、優占する林分やほぼ純林を形成している所もある。

標高 1,500m付近より標高 2,500 m付近では，コメツガ，シラビソ，オオシラビソなど亜高山針葉樹林が自然植生として生育している。急峻な地形，寒冷な気候条件で植物的生産が低く，加えて人々の生活域と直接にかかわることが少ないため，自然植生としての群落が広く生育している。

広葉樹林としては，ミヤマハンノキやダケカンバの高木層が優占し，林床にはシラネワラビ，ハリブキ，コバイケイソウ，ミヤマメシダなどの草本植物が高い被度で生育している。

標高 2,500m以上の高山帯は，蓼科山を北端に北横岳，天狗岳，根石岳，硫黄岳，横岳，赤岳，中岳，阿弥陀岳，権現岳，編笠山を南端にする各山頂付近を言う。気候条件も寒冷で，冬期には北西の季節風をまともに受ける厳しい立地条件下に高山帯の植生は成立している。

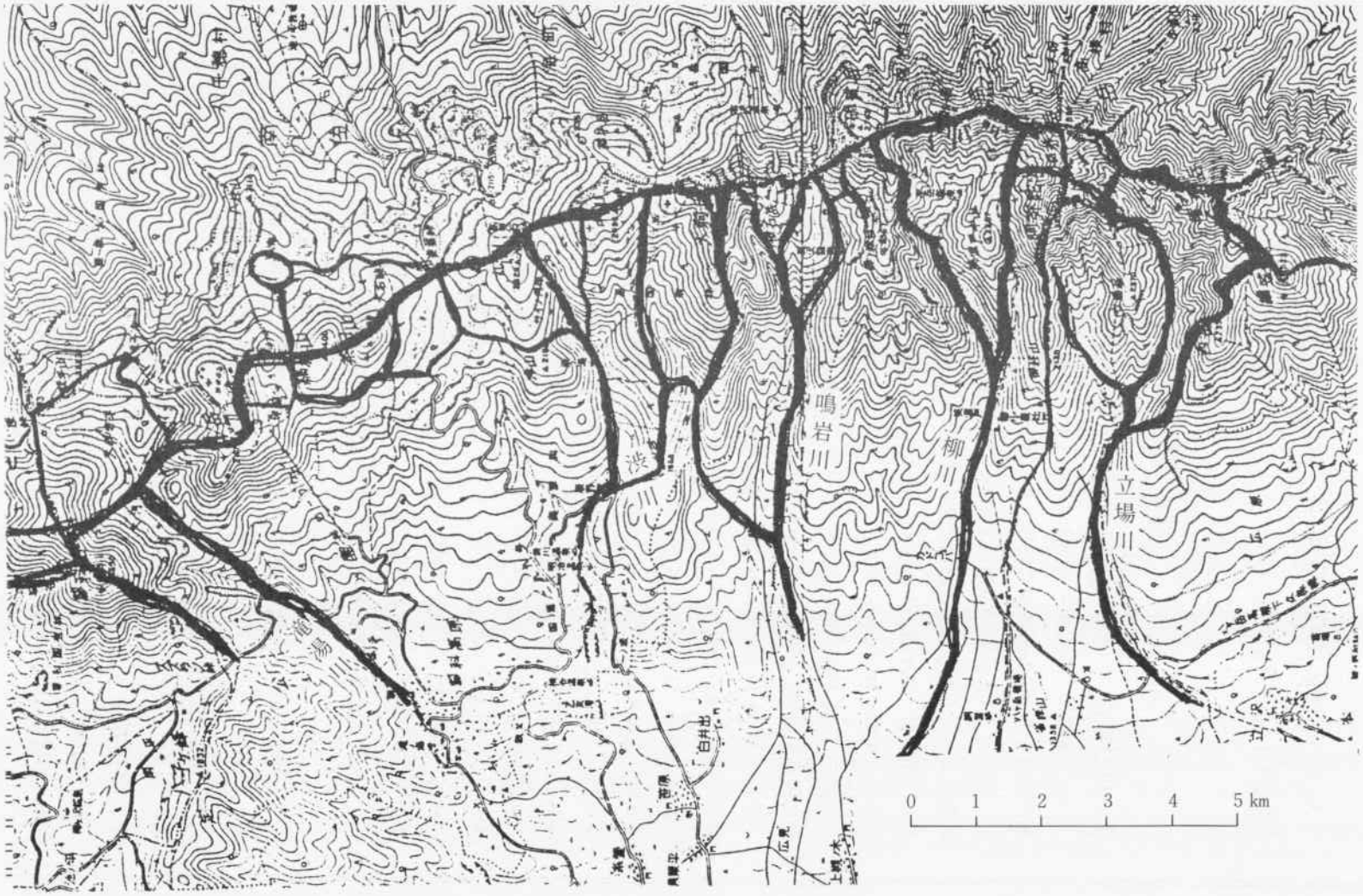
高山帯で最も広い面積の生育域をもつのがコケモモ―ハイマツ群集であり，これに次ぐものがタカネスミレ―コマクサ群集の生育域である。これらの高山帯の各植生は，その大部分が自然植生として現存している貴重な地域である。

2．調査方法

八ヶ岳地域は上述の如く非常に広範囲の地域になるので，植物分布調査は比較的植相(flora)の豊富な沢筋，即ち南から立場川本流や支流である広ヶ原沢，柳川とその支流の北

＊茅野市八ヶ岳総合博物館専門委員(植物)．原村社会教育指導員．

八ヶ岳調査コース ——— 太線部分



沢と南沢，鳴岩川の本流と支流，滝湯川，渋川や，南は編笠山，西岳をはじめ，北は蓼科山までの稜線と，阿弥陀岳への御小屋尾根筋，文三郎道，地蔵尾根，中岳と阿弥陀岳への登山道，峰の松目～硫黄岳の登山道などとその周辺を何年かかけ何回も実施した。キキョウ科（CAMPANULACEAE）のツリガネニンジン属（*Adenophora* Fisch）の分布をまとめると下記のようになる。

3．ツリガネニンジン属分布表とヒメシャジン・ミヤマシャジンの分類について

和名	学名	低山帯	亜高山帯	高山帯
(1) ツリガネニンジン	*A. triphylla* A. DC var. *japonica* Hara	――	――	
(2) シロバナツリガネニンジン	f. *leucantha* Hara	――	――	
(3) ソバナ	*A. remotiflora* Miq.		――	――
(4) ヒメシャジン	*A. nikoensis* Fr. et Sav.		――	――
(5) シロバナヒメシャジン	f. *leucantha* Sugimoto		――	――
(6) ホソバヒメシャジン	f. *linearifolia* Takeda		――	――
(7) マリシャジン	f. *globiflora* Hiyama		――	――
(8) ミヤマシャジン	var. *stenophylla*	――	――	
(9) ホソバミヤマシャジン	f. *stenophylla*	――	――	
(10) フクシマミャジン	*A. divaricata* Franch et. Sarat.	――		

ミヤマシャジン 1985.9.1 柳川北沢

ヒメシャジン 1973.9.17 柳川北沢

上表のように，変種，品種を含めて10種については，平成元年度迄に自生を確認していたのであるが，平成２年８月５日，諏訪教育会視聴覚委員会の委員との観察会で，柳川北沢のつめで開花中の白花で花冠が８裂のものの自生を確認した。このことについては次の新知見の項で述べる。

ソバナ，ツリガネニンジン，フクシマシャジンについては，基準標本との形質上の変異が少ないので分類は容易であるが，ヒメシャジン，ミヤマシャジンは花期でないと花柱の長さや萼片の形態がはっきりせず分類が困難である。

これらの分類の手がかりとして，日本植物誌，日本野生植物図鑑・合弁花編，原色新日本高山植物図鑑(I)，日本草本植物総検索誌，日本の野草，日本の高山植物などによると次項の表のようになる。

マリシヤジン
1984.9.13
柳川北沢

ソバナ
1985.8.11
立場川

	日本植物誌	日本野生植物図鑑（合弁花編）
ツリガネニンジン属	○多年草。茎は太い根茎。葉は互生または輪生し全縁または鋸歯（きょし）がある。花は下垂し，花冠は鐘形，帯碧色で5裂片がある。 ○欧亜大陸に約50種分布する。	○太い根茎のある多年草。茎葉はふつう輪生（または対生）あるいは互生し，全縁または鋸歯がある。 ○花は総状，円錐，まれに穂状花序になる。花冠は鐘形または漏戸状鐘形，紅紫色，淡紫色，まれに白色のものもあり，先は5裂する。 ○ヨーロッパ，アジアに約50種分布する。
ヒメシャジン	○亜高山帯に生える多年草。 ○根茎は直立し，群生することが多い。 ○葉は普通互生し，披針形または狭長楕円形で長さ3～7㎝。鋸歯がある。 ○花冠は鐘形，紫色で長さ1.5～2.5㎝、花柱は花冠と同長か少し突き出る。 ○環境により草丈の高低，葉の大小，花冠の色彩や大きさに変異が多い。	○甚だ変化多く，多くは無毛，根茎はやや太く茎は直立20～40㎝。 ○葉は多くは互生して線状披針形，鋸歯あり。 ○花柱は花冠と同長または少し長い。 ○萼（がく）の裂片は披針形である。
ミヤマシャジン	○ヒメシャジンの変種。 ○萼裂片は披針形で全縁。 ○花柱が花冠から突き出るもので分布は殆んど母種と重なる。	○ヒメシャジンの変種。 ○母種に似るが，萼の裂片は披針形をなし全縁で本州高山に産す。
	日本草本植物総検索誌	**原色新日本高山植物図鑑**
ツリガネニンジン属	○花はやや無梗（こう），葉は互生。花冠は上方開きたる広鐘形，花は細い梗がある。萼片は線形，しばしば歯牙（しが）がある。花梗は花より短い。	○多年草。 ○根茎は太く長くのび分枝する。 ○葉は互生ないし輪生する。 ○花は集散状下向。 ○ユーラシアのとくに東アジアに集中して約50種。

ヒメシャジン	○亜高山帯の半陰の岩地。 ○葉は卵形で披針形。 ○花柱は明らかに花の外へ突き出る。 ○花冠長15～30mm，5裂する。 ○花冠球形のものをマリシャジンという。 ○花冠6～8裂のものをヒヤマシャジンという。	○茎は直立し，高さ10～40cm，無毛または上部に細毛を生ずる。 ○茎葉は多数あり互生し，まれに対生，広披針形。 ○花柱は花冠とほぼ同長である。
ミヤマシャジン	○花は細い梗(こう)がある。萼(がく)片は長楕円形又は披針形で全縁。 ○花柱は花冠と同高又は少し出る。 ○花冠は鐘形。 ○花冠7～8裂のものをヤマナカシャジンという。	○ヒメシャジンの変種，萼裂片は全縁である。 ○葉が細く長さ4～8cm，幅1.5cm以下のものはホソバヒメシャジンとよぶ。 ○亜高山帯に多い。 ○花冠の裂片がさらに分裂するものをヤマナカシャジンとよぶ。
	日本の野草	日本の高山植物
ヒメシャジン	○高さ20～60cmになる多年草。 ○根茎は長くやや太い。茎は無毛で直立し群生することが多い。 ○葉は互生し披針形で長さ3～7cm，ふちに鋸歯があって先はとがり，基部はくさび形となる。 ○花冠は鐘形で先が5裂する。 ○花柱は花冠とほぼ同じ長さでやや外へ突きでる。	○本州中部地方以北の亜高山帯～高山帯の岩礫地に生える多年草。 ○根は太くまっすぐ伸びる。 ○茎は直立し高さ20～40cm，葉は幅0.5～2cmの披針形で先は鋭くとがる。 ○花冠は1.5～2.5cmの鐘形で先は5裂する。 ○花柱は花冠とほぼ同長，変異が多い。
ミヤマシャジン	○ヒメシャジンの変種。 ○萼片披針形でふちに鋸歯がない点や花柱が花冠から突きでることなどで区別される。 ○母種のヒメシャジンと分布域が殆んど同じである。	○ヒメシャジンの変種。 ○萼片が全縁のもの。 ○分布と生育地は母種と同じ。 ○葉の幅が細いものをホソバミヤマシャジンという。 ○花冠の裂片が6裂以上に裂けるものをヤマナカシャジンという。

4．ヒメシャジンとミヤマシャジンの新知見

ヒメシャジンについて上述の資料の記載をみると，葉については，「普通互生する」と，日本植物誌，日本野生植物図鑑，原色新日本高山植物図鑑，日本の野草，日本の高山植物，植物総検索誌の何れにも明記され，大事な分類の観点に挙げられている。「披針形である」といっているのはどれも同じであるが，「鋸歯があり先が鋭くとがる」と説明しているのは，植物誌，日本野生植物図鑑，日本の野草，日本の高山植物である。

花冠についてみると，鐘形であることについては何れも明記しているが，「花冠の先が5裂である」と述べているのは，日本植物誌，日本野生植物図鑑，日本の野草，日本の高山植物，植物総検索誌である。

花柱の長さについては，「花冠とほぼ同長である」と，原色新日本高山植物図鑑，植物総検索誌，日本野生植物図鑑，日本の野草，日本の高山植物の何れにも記載されている。

更に，植物総検索誌では，ヒメシャジンの品種としていくつかを挙げているが，花冠が球形のマリシャジンが，ヒメシャジンと混生しているのを，柳川北沢で確認している。又，花冠7～8裂のものをヒヤマシャジンとしているが，花冠のみの説明であり判然としない。これらは環境の相違により，葉，花冠，色彩に変異が多く容易に分類できない。

ミヤマシャジンについては，ヒメシャジンの変種としているのが，植物総検索誌を除く他の図鑑である。植物総検索誌では，*Adenophora nipponica* Kitamuraとして明記されているし，牧野新日本植物図鑑でも，*A. lamarckii* Fischとしている。

ミヤマシャジンについては，分類点として，萼片は長楕円形又は披針形で全縁であることについては何れも同じであるが，花柱については「花冠と同長又は少し出る」が植物総検索誌であり「花柱が花冠から突き出る」としているのが日本植物誌と日本の野草である。

又，日本高山植物図鑑には，花冠の裂片が更に分裂するものをヤマナカシャジン（f. *multifida* Hara）というとあり，植物総検索誌では，花冠7～8裂のものをヤマナカシャジン（f. *muliloba* Kitam.）としている。

ミヤマシャジンについては，萼片についての分類はどれもほぼ同じであるが，花柱の長さについては，上述したように図鑑により相違がみられるし，ミヤマシャジンの品種について記述しているのは，日本の高山植物と植物総検索誌，原色新日本植物図鑑のみである。

白花で花冠が8裂のもの（次頁の写真参照）が昨夏柳川北沢右岸の半陰地で自生しているのを初めて確認した。これは，八ヶ岳におけるツリガネニンジン属一覧表に一種加えられるべきもので，八ヶ岳での分布はこれで11種となる。

これは，植物総検索誌，原色新日本高山植物図鑑，日本の高山植物のみに記述されている，ヤマナカシャジンと同定してよいと思われる。

原色新日本高山植物図鑑によると，ヤマナカシャジン(f.*multifida* Hara)ということになる。萼裂片に鋸歯があり，葉が細いので，ホソバヒメシャジンに極めて近いものである。更に自花であったということは，花の中の色素がうまく発色しない遺伝形質の変化と考えられ，シロバナヤマナカシャジンということになる。又この周辺には，他にヤマナカシャジンを確認することはできなかった。

昨年は，ツリガネニンジン属の花期に八ヶ岳の柳川北沢のみ赴いただけで他地域にこれを確認することができなかった。

花冠8裂

シロバナヤマナカシャジン 1990.2.8.5 柳川北沢

5．おわりに

八ヶ岳のツリガネニンジン属の分布については　これによって11種を数えることになったが，植物総検索誌のみに記述されているヒメシャジンの品種であるヒヤマシャジン（f. *multilotia* Honda)－花冠6～8裂や，オオバナシャジン（f. *mocrocalyx* Takeda)－花冠長3㎝の自生は確認していない。

他の沢や地域，特に西岳山頂南斜面の群生地などを重点的に調査することにより，上記の種の確認ができるものと思われるので今後調査を行いたい。

引用文献

今井建樹ほか（1986）：諏訪の自然誌・植物編，諏訪教育会，P.629
大井次三郎（1971）：日本植物誌，北隆館，P.1281
佐竹　義輔（1981）：日本野生植物図鑑Ⅲ，平凡社，P.150
清水　建美（1981）：原色新日本高山植物図鑑(Ⅰ)，保育社，P.53
杉本　順一（1976）：日本草本植物総検索誌，井上書店，P.584
諏訪教育会（1980）：諏訪地図
豊国　秀夫（1988）：日本の高山植物，山と溪谷社，P.147
林　　弥栄（1988）：日本の野草，山と溪谷社，P.128
宮脇　　昭（1986）：長野県の潜在自然植生図，長野県，P.72

参考文献

武田　久吉（1978）：原色日本高山植物図鑑，保育社
牧野富太郎（1978）：牧野新日本植物図鑑，北隆館

茅野市八ヶ岳総合博物館紀要1：11—17（1991）

コイカルの生息状況

野　沢　進之輔*

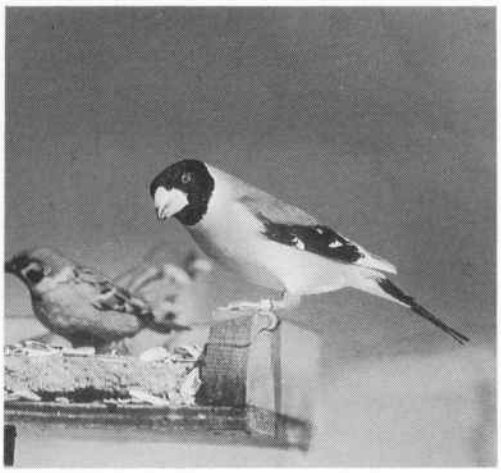
1．はじめに

コイカル（*Eophong migrataria*）は，中国満州・シベリア東南部・朝鮮半島などで繁殖し，冬期は中国南部へ渡る。日本へは冬鳥として，本州中部以西に現われる。まれに見られるくらいで，数は少ないが，最近は少しずつふえていく傾向にあるといわれている。いままで，西日本二ヶ所で繁殖の確認がされているが，生活についてはよくわかっていないことが多い。

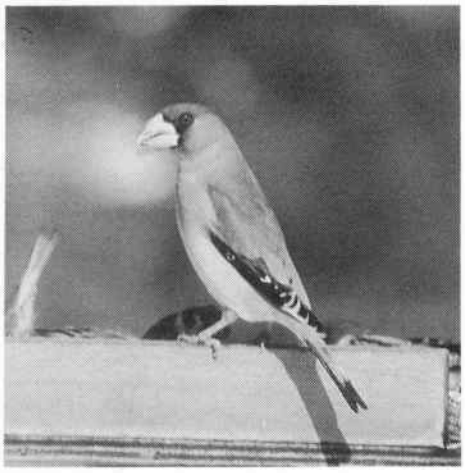
コイカルは，イカルよりやや小さい。頭の黒色部はイカルより大きく，胸には褐色味がある。雌はイカルと違って，頭の黒色部はない。

諏訪地方の記録としては，1977年から1984年までの冬期間に，茅野市横内の人家の餌台に，年によって違うが，5～22羽の群れで飛来している。

1989年秋，茅野市内でコイカルを見かけ，餌づけに成功し，1990年秋～1991年冬も生息し続けているので，この期間のコイカルの生息状況を報告する。



餌台に来たコイカルの雄（左）と雌（右）



2．生息地域と調査方法

コイカルの生息地域は，茅野市豊平で，豊平小学校を中心として，半径約 300m の円の範囲である。この地域は，塩之目と南大塩の村落に囲まれていて，水田が広がり，小学校周辺の台地には畑地もあり，ところどころに高い木や林や，斜面にはやぶがある。

図1に示した生息地域のA～Rまでの環境は，次のとおりである。

Ⓐ庭木のウメ・Ⓑ大きなケヤキでヤドリギが生えている・Ⓒヌルデ，カシグルミの木に

＊茅野市八ヶ岳総合博物館展示専門委員（昭和60年度～63年度），神明小学校．

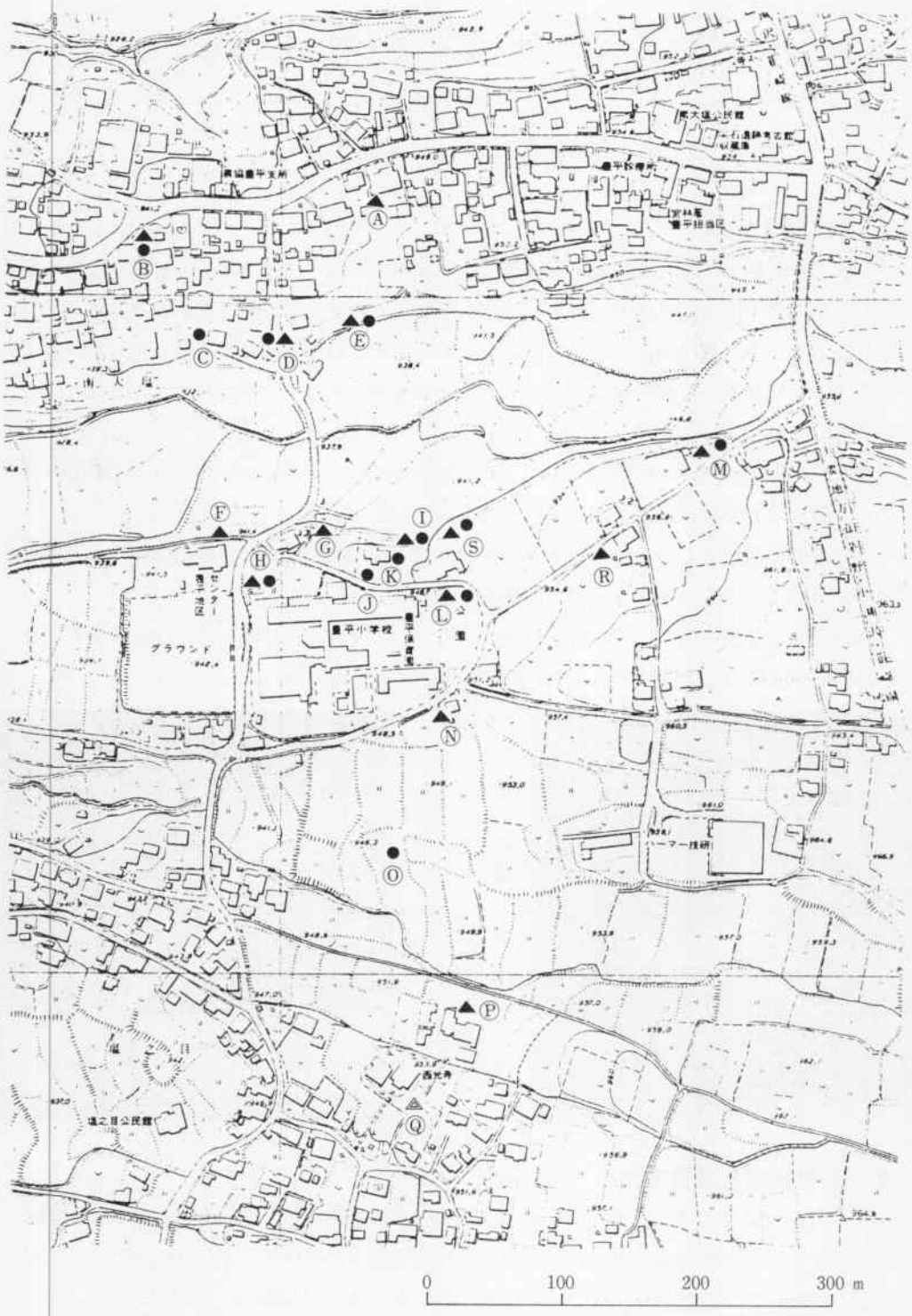


図1　コイカルの生息地域と観察された地点　▲ 休息地　● 採食地　△ ねぐら

クズがからまっている・Ⓓサワラと高いケヤキ・Ⓔシナノキ，クヌギ，カラマツが各1本ずつで高さ15cm位・Ⓕクリを中心とした雑木林・Ⓖケヤキを主とした雑木林・Ⓗモミ，サワラ，ソメイヨシノ，ネムノキなど忠魂碑のまわりの林・Ⓘ急斜面でウコギを主としたやぶで，そこにクズがからまっている・ネムノキ・Ⓚ餌台設置場所・Ⓛ大きなケヤキ・Ⓜ大きなケヤキ・Ⓝサワラ・Ⓞ学校菜園，ヒマワリが植えられていた・Ⓟクワ，ポプラ，サワラなどの林・Ⓠサワラ，アカマツ，スギが各一本ずつで高さ約12m・Ⓡ大きなカシグルミ3本・Ⓢオニグルミ

調査方法は，餌台を中心に歩きまわり，コイカルの群れを見つけると，数，鳥の位置，鳴き声，活動のようす，餌のとり方や内容など記録していった。

調査日は，1989年10月～1990年3月まではほぼ全日で，1990年4月～1991年2月11日までは毎週1回である。1日の観察時間は1～3時間が多いが，時には終日観察も行なった。

3．結果及び考察

(1) 経　過

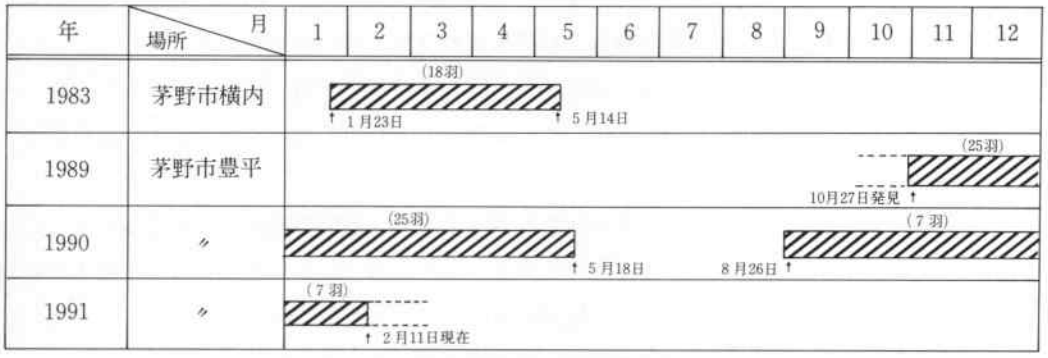


図2　コイカルの滞在期間

1989年10月27日，S地点でクルミの木で休息中の11羽（うち♀4羽）の姿を初めて見かけた。ほかにイカルも2羽混じっていた。同日O地点の学校菜園のヒマワリ畑で15羽採食していた。この中には，ひならしいごま塩頭の個体もいた。以前茅野市横内の記録での初渡来は，1月下旬～2月初旬で，これに比べると約3ヶ月近く早い。

11月11日，K地点に餌台を作り，そこにヒマワリの種子を置く。その回りに枯れたヒマワリの茎を立てる。

11月13日　餌台へ25羽来て採食した。餌台のすぐ横のオニグルミにからまっているクズの実や，J地点の急斜面のウコギにからまっているクズの実も食べていた。O地点のヒマワリ畑は11月中旬まで利用していたが，以後とりはらってしまったので，それ以来ここには

来なくなった。11月は13日以後，餌台へ毎日訪れた。

12月はK地点の餌台に毎日群れで来て採食した。群れで来て，10分～20分間位食べて，いっせいに飛び立った。群れの大きさは，安定していて25羽であった。このうち雌は6羽のみで，雄が19羽と多かった。12月25日に5㎝の雪が降ったが，ほとんど1日中，餌台かそのまわりで過ごしていた。

1月になると，クズ，ヤドリギなどの種子が無くなり，餌はヒマワリだけになり，餌台への飛来は1日3～6回と多くなった。

2月になると25羽いっしょに来ることもあったが，5～11羽と分散して餌台に来ることが多かった。

3月は，2月と同じく分散して餌台に来ることが多かった。ケヤキなどの高い木に群れでとまり，おいかけたり，おいはらったりする行動をくりかえし行っていた。繁殖のためのペアーフォーメーションの行動と思う。3月18日，環境庁の許可を得て，網による捕獲をし，標識用の足輪（右足）と，カラーリングを左足につけ，放した。捕獲羽数は25羽のうち15羽で，♂11羽，♀4羽であった。15羽のカラーリングの色は，♂R（赤），♂G（緑），♂B（青），♂BL（黒），♂O（オレンジ），♂V（紫），♂BW（白），♂BO，♂BR，♂BV，♂BY（黄），♀Y，♀W，♀BG，♀B BLである。なお眼の虹彩の色から♀Wと♀B BLは幼鳥であった。捕獲後も，以前と変わりなく餌台へ来ていた。

4月もずっと餌台に来ていた。4月22日，餌台での争いの時，いままで聞かれなかったグェ・グェ・グェという鋭い声を出した。このころからどの個体もくちばしの付け根が，青黒く変わってきた。

5月になると1日の餌台への飛来回数が減ってきて，25羽の群れでは来なかった。13日は9羽がS地点にあるオニグルミの花や芽をさかんにつついていた。18日は午前中の観察では，餌台へは来ないでG地点やL地点の高い梢でさえずっていた。13日ごろからは，餌台のひまわりが減っていないことから，他に餌が得られてきたものと思う。

5月24日の観察では，姿を見たり，声を聞いたりできなかった。これ以後8月まで確認できなかった。なお餌台のヒマワリは，切らすことなく置いておいた。

8月26日，AM7時28分，コイカルの♂（ノーマーク）が1羽R地点の電線に止まっていて，近づくとL地点のケヤキに移り，さえずっていた。餌台には来なかった。

9月2日，AM7時18分，L地点で♂が1羽さえずっていた。

9月6日，AM5時35分，J地点横の電線に♀2羽（1羽ノーマーク，1羽W）が止まっていた。AM6時，G地点のケヤキに5羽とまっていた。しかし餌台には近づかなかった。くちばしの付け根は，青黒くなく，黄色であった。くちばしの付け根の色の変化は婚姻と関係すると思われる。

以後9月・10月は，少数ではあるが，姿や声が小学校周辺で確認できた。

11月12日，この日，夏以来初めて，餌台に来てヒマワリを食べていた。羽数は7羽で，♂2羽，♀1羽はノーマークであったが，♂3羽（BY，BR，V）と♀1羽（BG）は，1990年3月に同じ場所で捕獲し，マークした個体であった。

12月・1月・2月中旬まで，ずっと7羽であった。4月までの25羽の群れは，どこへ分散したのか不明である。

(2) 採食と休息

いままで餌として確認できたものは，ヒマワリ，クズ，ネムノキ，ヤドリギ，シナノキ，ヌルデ，ケヤキ，カエデ類の種子であった。春先，オニグルミの花と若芽をつついていた。1回だけ，止まっていた枝の近くに飛んで来た虫を，飛び立って捕食したのを見た。

休息は，ケヤキ，クリ，クヌギなど大きな落葉樹の上部に止まっている場合が多いが，サワラなどの常緑樹でも見られた。高木以外では，I地点の急斜面のウコギを主としたやぶでも長時間休んでいることがあった。

休息や採食によく利用したI地点の急斜面のやぶ

休息中に，サワラの樹皮をはいで，かんだり捨てたり，落葉樹の小さな枝をくちばしで折ってくわえ，かんで捨てたりする動作が見られた。これは採食行動とはやや異なり，くちばしをみがく動作にも思えた。休息中には，枝から枝に移り渡っての，小さな争いも見られたが，2月・3月・4月に入ると，たえずくりかえしていた。このころはペアーフォーメーションの時期かと思われる。

採食も休息もねぐら入りも，群れでいっせいに行動することが多いが，1990年には2月に入ると，5～11羽単位の小集団の行動が多くなった。

群れの構成は，コイカルだけの時がほとんどであったが，1989年10月と1990年2月の2回，イカルがそれぞれ2羽と5羽混じって行動していた。そのほか，アトリ3羽とシメ1羽が，それぞれ1回ずつ混じって木の梢で休息していたが，飛び立つときは別であった。

(3) 鳴き声

ふだんはケッとかキョッとか鳴いていたが11月～1月でも天気のよい暖かい日には，♂の中の1～2羽が高い梢に止まって，ピキョピーキョなどと，さえずっていた。2月になるとさえずりは盛んになり，3月，4月になると，ひんぱんに聞けるようになった。

Q地点のサワラのねぐら

4月22日で餌台での争いで，グェ，グェ，グェという声が数個体から聞かれた。

(4) ねぐら

1990年1月のねぐらは一定していて，Q地点のお寺の横にある三本の木のうちのサワラであった。この木は高さ約12mで，下部5mは下枝がない。

1990年1月9日の調査では，PM2時53分に，餌台からQ方面に飛んでいき，3時25分にサワラの中に入りこんだ。3時40分には，じっとして動かない個体や，枝の中を動きまわる個体が見られたが，4時になると，動きまわる個体は無くなった。サワラ内では，一ヶ所に固まって寝るのではなく，この木の上部の枝の先の方に1羽ずつ，1つの枝に1羽と，ばらばらに止まっていた。

1990年1月16日の調査では，午後3時47分に，お寺のポプラに止まり，そのあと近くのヤナギで休息し，4時13分にねぐらのサワラに移った。日によってねぐら入りの時間は違っており，天候や日照時間によって変化するものと思われる。

1990年の4月22日の調査では，このQ地点のねぐらは，利用していなかった。この時期は，餌台に飛来する時も小群に分かれていたので，ねぐらも分散しているかもしれない。この日の調査では，他のねぐらは見つけることができなかった。

(5) その他

K地点の餌台には，コイカルのほかに，数種の鳥も来た。1990年2月10日の観察では，シメ3羽，カワラヒワ45羽，スズメ50羽，アトリ3羽，シジュウカラ7羽，イカル5羽が観察された。餌台での順位はコイカルが一番強かった。スズメのみ，コイカルに混じって採食することがあった。1991年1月14日の観察では，シメが11羽，餌台の周辺におり，コイカルが7羽と少ないためか，シメが餌台を占拠していることが多かった。

4．まとめ

いままで我国では，コイカルの生態はほとんどわかっていないが，今回の観察で一部分が明らかになった。冬鳥といわれているが，熊本県（1980年）と島根県（1982年）に繁殖

例があることや，1990年の場合，豊平で観察されなかったのは，５月19日から８月26日までの約３ヶ月だけであることや，春先（３月，４月，５月）には，ペアーフォーメーションと思われる行動が見られたことなどにより，諏訪地方でも繁殖の可能性があると思われるので，今後の動きを見続けていきたい。

参考資料

野沢進之輔他（1986年）：のめりこみバードウォッチング・誠文堂新光社

中村　登流　（1986年）：野鳥の図鑑・保育社

高野　伸二　（1982年）：日本の野鳥・日本野鳥の会

小林　桂助　（1965年）：原色日本鳥類図鑑・保育社

鳥類保護連盟（1988年）：鳥630図鑑・日本鳥類保護連盟

茅野市八ヶ岳総合博物館紀要１：18－26（1991）

御射鹿池流入水の水生不完全菌類

永　富　直　子＊

1．緒　　言

「菌類」とは，カビ・キノコ・酵母の仲間をさす。分類学的には，

真正菌門

鞭毛菌亜門（ミズカビなどの仲間）

接合菌亜門（ケカビなどの仲間）

子のう菌亜門（チャワンタケや冬虫夏草などの仲間）

担子菌亜門（キノコやキクラゲの仲間）

不完全菌亜門（ふつうに見られる「カビ」の仲間）

に分けられている。このうち「不完全菌亜門」とは，担子菌類と子のう菌類の胞子相（分生子*1相)に基づいて，便宜上ひとまとめにした人為的な分類群である。不完全菌類には有性生殖が既知のものと未知のものとがあり，前者は子のう菌類，担子菌類として正式名称をもつ。後者は有性生殖が発見された時点で，その特徴によって分類することになっている。しかし，有性生殖が既知のものでも，一般に無性生殖世代（分生子世代）の方が我々の目にふれやすいので，不完全菌類としての名前で呼ばれていることが多い。

「水生不完全菌類（aquatic hyphomycetes）」とは，水中生活に適応した形質や生態をもっている，子のう菌類や担子菌類の分生子世代を一括した呼称で，系統的には多系である。この菌群は主として渓流・湖沼などに生活し，世界に広く分布しており(Nilsson, 1964; Ingold, 1966)，水中の落葉・落枝を基質*2とするものが多い。これらは細菌類とともに，水生昆虫などの動物が落葉を栄養源として利用しやすいように「加工処理」を施すという重要な役割を果している(Webster & Descals, 1981)。また分生子の形態は，テトラポット形（四射形），S字形のものが多いが，放射形，くら形，樹枝形など極めて特徴的である（図１)。このような形態の分生子は水中で，沈むのが遅く分散しやすい（Ingold, 1966)，泡に捕捉されやすい（Iqbal & Webster, 1973a)，基質にとりつきやすい（Webster, 1959)，などの利点があると考えられている。

採集・観察の方法には，①落葉樹林内の渓流のよどみにかたまっている「浮き泡」(Plate 1 - A）を採集し，これに含まれている分生子を顕微鏡下で観察する（Plate 1 - B)，②渓流や湖沼の底の分解途上の落葉を，シャーレに入れ滅菌水に浸して分生子に導く，の２法がある。①の方法で，より多数の種を得ることが知られている（Nillson, 1964; Miura, 1974)。

＊茅野市八ヶ岳総合博物館学芸員．

以上のような興味深い生態と分生子形態を示す水生不完全菌類を，容易に採集できる地点は茅野市内にも多数あると思われるが，諏訪地方における菌類に関する報告は諏訪教育会（1978）のキノコ類についてと，Ando & Kawamoto (1986) のみである。

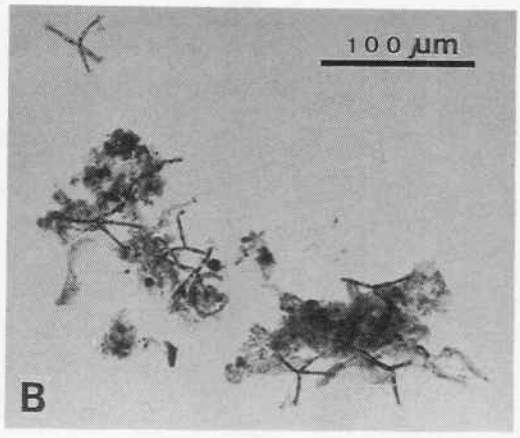
今回，別記鳥類調査を行った際，池の流入水に「浮き泡」が見られたのでこれを採取した。この試料を培養に供することが設備上できなかったため培養下の形質は観察できず，不十分な知見であるが，泡試料中に見られた水生不完全菌類の分生子を紹介する。

＊1　菌類がつくる無精的な胞子。

＊2　菌類がこれを分解して栄養とする有機物。

Plate 1

A．渓流のよどみに浮かぶ「浮き泡」(矢印)。手前の結んでは消えるような泡ではなく，密で白くかたまって浮いている。



B．浮き泡の中に見られる，テトラポット形の水生不完全菌類の分生子。

2．材料と方法

試料は茅野市湖東の御射鹿池に注ぐ渓流（渋川より引かれた汐）で採取した（図2）。この渓流は，カラマツ・シラカンバ・ミズナラ等が混在する二次林の中を流れ，夏に晴天が続くと水が涸れることがあった。

試料の採取は1990年8月下旬，この池への流入口の約10m上流の地点にあったよどみで行った。浮き泡は滅菌したガラスびんに採集し，直ちに少量のホルマリンを注入，実験室へ持ち帰った。そして少量のコットンブルー（青色の染色色素）を溶かしたＦＡＡ（ホルマリン酢酸水*3）を泡試料に適量加え，分生子を染色した。試料をしばらく静置した後，底の沈殿物をピペットで吸い取り，1滴スライドグラス上に滴下してカバーグラスをかけ，光学顕微鏡での観察・写真撮影に用いた。なお採取時の水温は10.4℃，pHは約4.8であった。

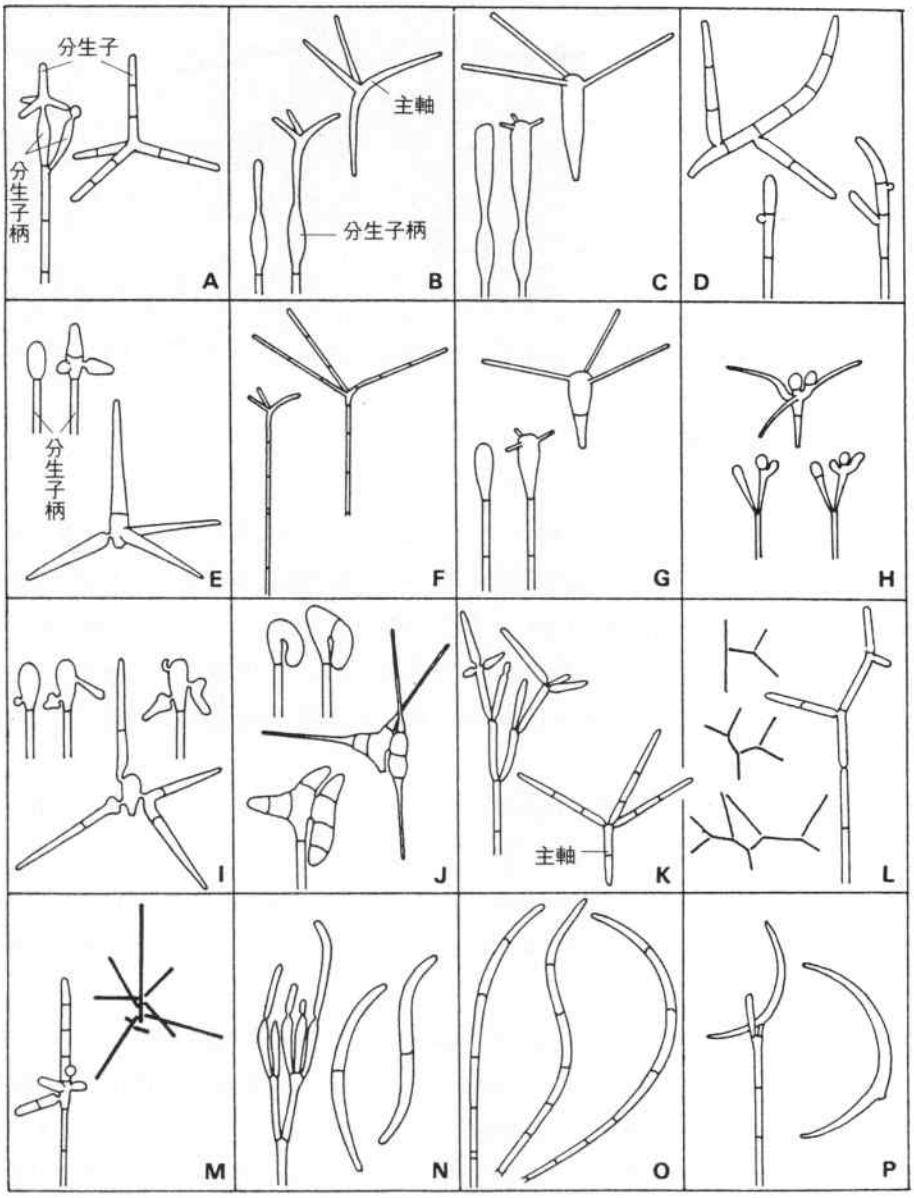


図１．代表的な水生不完全菌類の概念図（分生子とそのでき方）　三浦，1981より

A：*Lemoniera*（レモニエラ），B：*Alatospora*（アラトスポラ），C：*Clavatospora*（クラバトスポラ），D：*Tricladium*（トリクラディウム），E：*Triscelophorus*（トリスケロフォルス），F：*Tetrachaetum*（テトラキーツム），G：*Clavariopsis*（クラバリオプシス）H：*Tetracladium*（テトクラディウム），I：*Lateriramulosa*（ラテリラムローサ），J：*Campylospora*（カンピロスポラ），K：*Articulospora*（アーチクロスポラ），L：*Varicosporium*（バリコスポリウム），M：*Dendrospora*（デンドロスポラ），N：*Flagellospora*（フラゲロスポラ），O：*Anguillospora*（アンギロスポラ），P：*Lunulospora*（ルヌロスポラ）．

＊3　ホルマリン酢酸水

ホルマリン----------10mℓ
氷酢酸----------5 mℓ
蒸留水----------85mℓ

図2．採取地点 ▶

3．分　類　結　果

1．*Arborispora* sp.　　(Plate 2 - A)

Plate 2 - Aに示す分生子は，主軸から生じた第1次分枝の基部からさらに次の分枝が伸長していることから *Arborispora* 属菌（Fig.4）のものと思われる。分生子の大きさ，分枝の長さや形態が *A. dolichovirga* Ando (1986) によく似ている。しかし原記載で本種は分枝数が5～8，第2次分枝を形成することもあるという点で異なっている。今回観察された分生子は分枝が10本以上あり，2本の「第3次分枝」を形成している。今回の調査で1分生子のみ発見された。

2．*Articulospora tetracladia* Ingold　　(Fig. 1，Plate 2 - B, C)

Trans. Br. mycol. Soc. 25：339-417. 1942

分生子はテトラポット形。主軸は15～20×2～3 μm，3本の枝は20～25×2～3 μm，隔壁は1～3。分生子間の大きさにはかなり差がある。出現種中最も普通に見られた。

分生子の形成過程はFig. 5 を参照のこと。

3．*Articulospora tetracladia* Ingold f. *angulata* (Tubaki) Nilsson

Symb. Bot. Ups. 18：1-130. 1964　　(Fig. 2，Plate 2 - D, E)

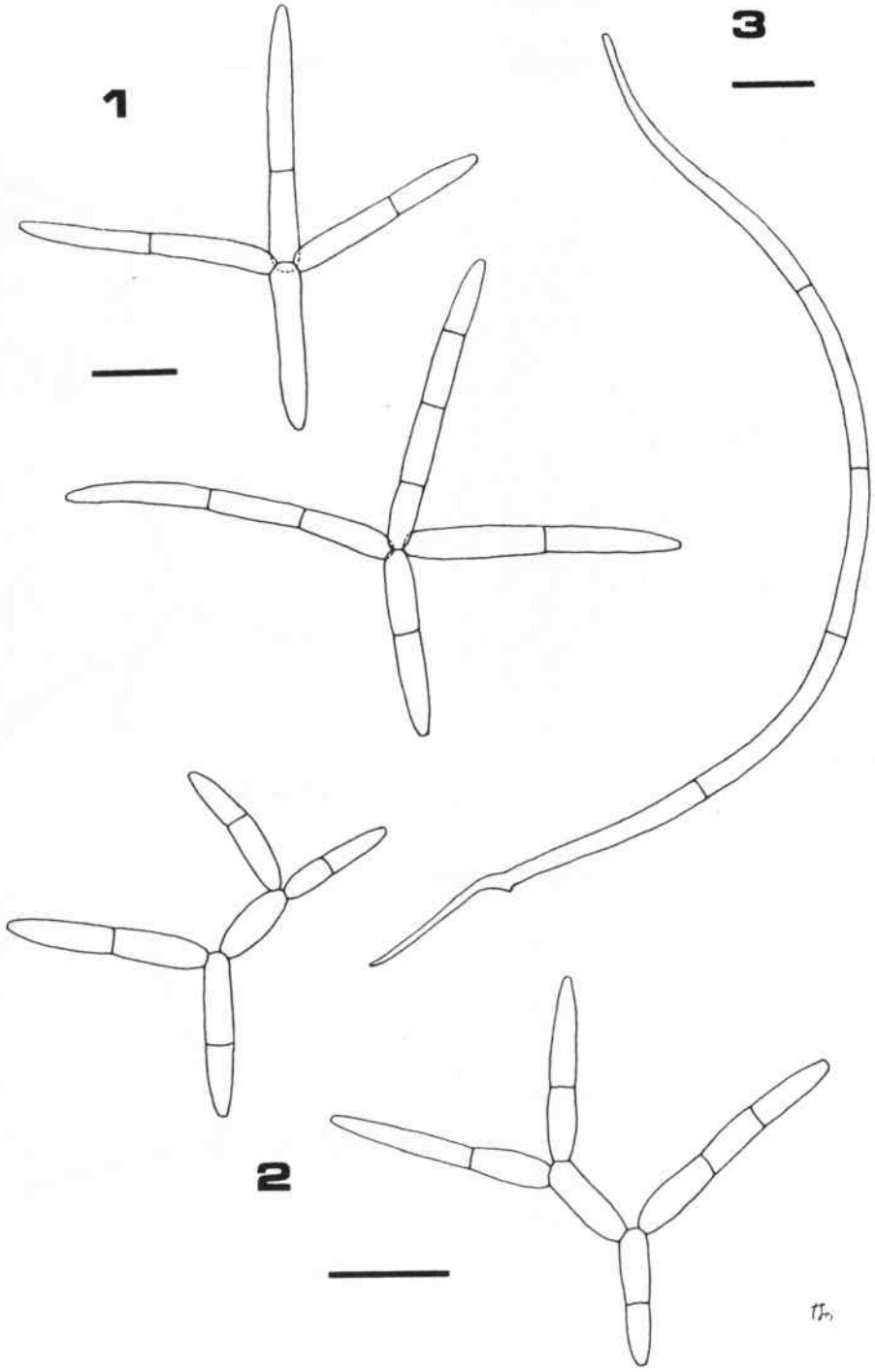
本種は *A. tetracladia* に包含される場合もある。*A. tetracladia* の分生子は1本の主軸の先端から3本の枝が伸長するのに対し，本種分生子は1本の主軸から2本の枝が伸び，その片方においてさらに2本の分枝が生じるものである。本種の分生子も普通に見られた。

4．*Centrospora filiformis* (Greathead) Peterson　　(Fig. 3)

Mycolologia 54：584-585. 1962

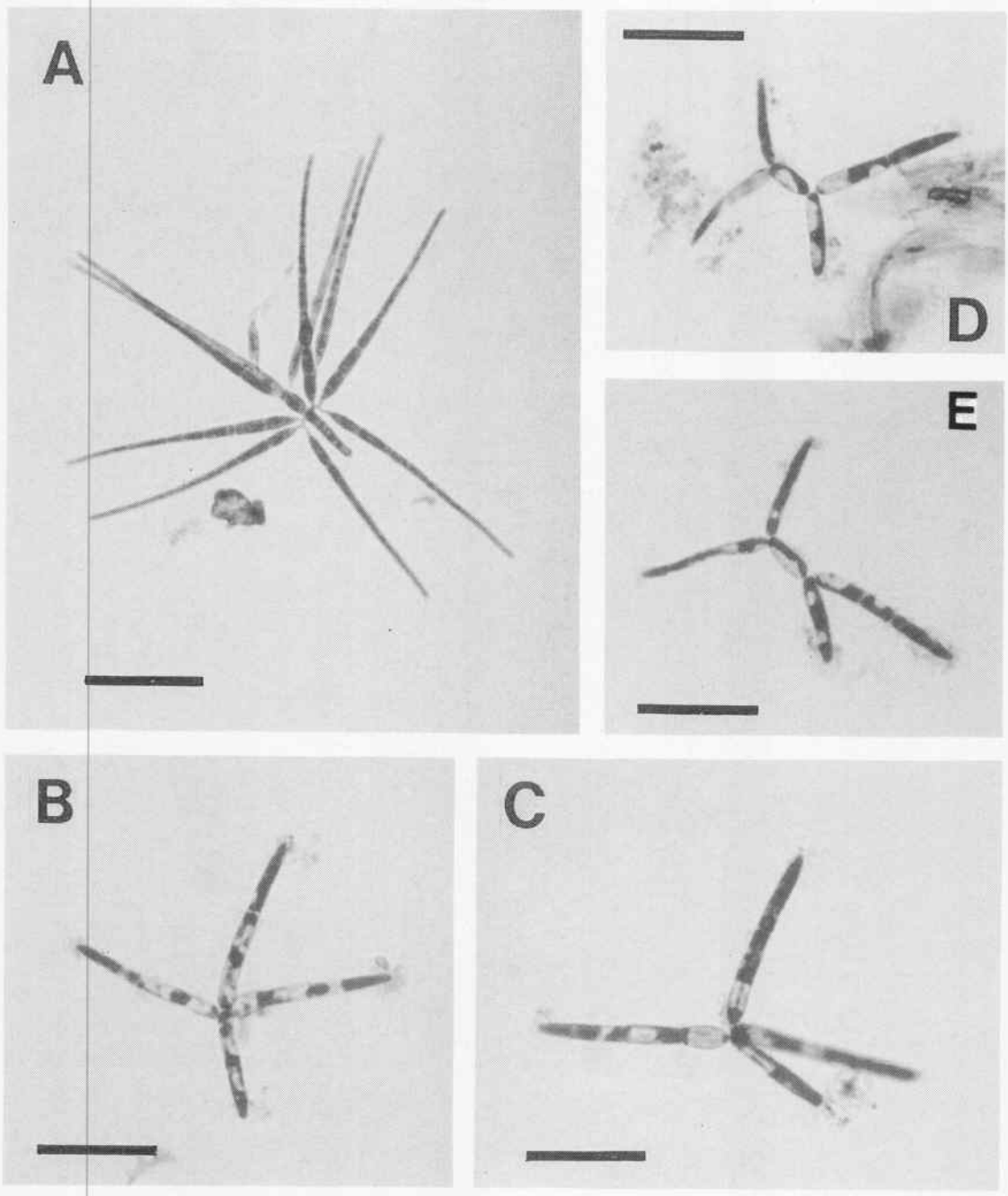
分生子は長さ140～175 μm，幅は中央部の太いところで2～3 μm，隔壁は4～7。ゆるいS字形である。一端の直線的に先細りとなっている部分はbasal process と呼ばれる突起であり，この基部が分生子との接着部（attachment scar)で，幾分尖った形となっている。本種の分生子は少なかった。

分生子のでき方はFig. 6 を参照のこと。



Figs. 1～3 1. *Articulospora tetracladia* Ingold.
2. *A. tetracladia* Ingold f. *angulata* (Tubaki) Nilsson.
3. *Centrospora filiformis* (Greathead) Peterson. (Bars=10μm)

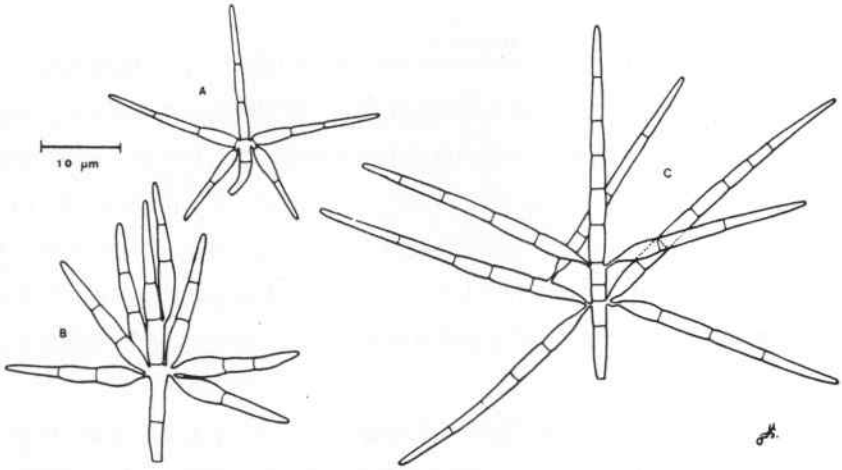
Plate 2



A. *Arborispora* sp.

B, C. *Articulospora tetracladia* Ingold.

D, E. *A. tetracladia* Ingold f. *angulata* (Tubaki) Nilsson. (Bars = 20 μm)



Arborispora spp. (pure culture on LCA medium). Detached conidia. A. *A. palma*. B. *A. multisurcularis*. C. *A. dolichovirga*.

Fig. 4 *Arborispora* 属3種の分生子（Ando & Kawamoto, 1986より）

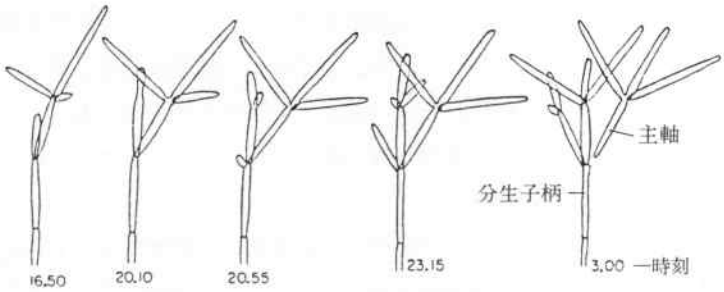


Fig. 5 *Articulospora tetracladia* の分生子形成過程（Ingold, 1975より）

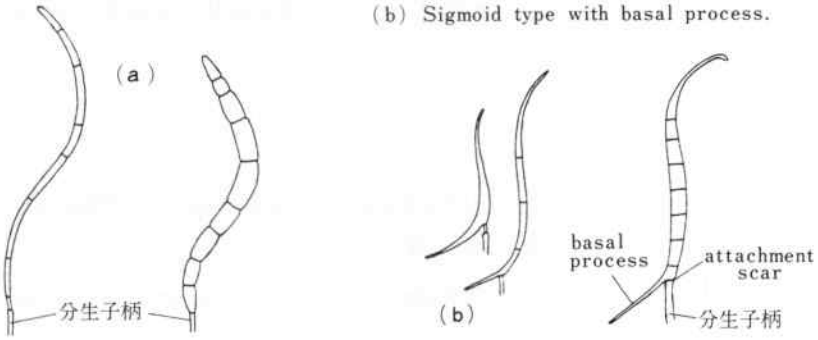


Fig. 6 S字形の分生子のいろいろ　(Nilsson, 1964より)
C. filiformis は(b)の中央のタイプ。

4．考　察

*Arborispora*は*A. palma*, *A. multisurcularis*, *A. dolichovirga*の3新種をもって不完全菌類の新種としてたてられたが，水生不完全菌類として記載されてはいない。今回採取した浮き泡中に*A. dolichovirga* に類似の分生子が1例だけ見られたが，本種の原記載は落葉から分離された培養株によるもので不一致点があるので，*A. dolichovirga* の分生子に該当するか否かは，次年度に十分な採集と観察を行い検討したい。一般に天然で基質上に形成された分生子と培養下で得られたものでは，形・大きさ等に若干の違いがあることが多いので，次年度には，泡試料中の分生子を純粋培養し，培養下の形質や分生子の形成のされ方を確認する必要があろう。

また，*A. maltisurcularis* は新潟県と茅野市蓼科において落葉から分離・培養され新種記載された菌である。*Arborispora* 属菌が茅野市付近に広く分布している可能性があるので，今後注目していきたい。

Iqbal & Webster（1973b）は，Englandで川の流水中の水生不完全菌類の分生子濃度を通年調査し，落葉のある8月から初冬にかけて全搬に分生子濃度は増加するが，冬から春にかけてのみ出現する種もあるという結果を得た。そしてこうした季節変動は，種によって利用する基質の種類が異なること，分生子の形成に最適な温度が異なることなどに起因するのであろうと考察している。今回の報告は1回のみの採取によるもので，今後本地点で各月毎に浮き泡の採取を行い調査を繰り返すことにより，水生不完全菌類相及びその季節変動が明らかにできるものと思う。

また本地点は流水のpHがやや低く，このことが菌類相に影響を与えているのかどうか，同様の環境でpHが中性に近い採集場所を検討し，平行して調査を行う予定である。

5．謝　辞

本研究を行うにあたり御指導・御協力をいただきました，日本大学薬学部　椿啓介教授，筑波大学生物科学系　徳増征二助教授，ならびに協和醗酵工業㈱東京研究所　安藤勝彦氏に心より感謝申し上げます。

6．引用文献

Ando, K. & Kawamoto, I. 1986. *Arborispora*, *a* new genus of Hyphomycetes. Trans. mycol. Soc. Japan **27**: 119 - 128.

Ingold, C. T. 1942. Aquatic Hyphomycetes of decaying alder leaves. Trans. Br. mycol. Soc. **25**: 339 - 417.

Ingold, C. T. 1966. The tetraradiate aquatic fungal spore. Mycologia **58**: 43-56.

Ingold, C. T. 1975. Convergent evolution in aquatic fungi: the tetraradiate spore.

Biol. Jour. Linn. Soc. **91** : 1 - 25.

Iqbal, S. H. & Webster, J. 1973a. Trapping of aquatic hyphomycete spores by air bubbles. Trans. Br. mycol. Soc. **60** : 37 - 48.

Iqbal, S. H. & Webster, J. 1973b. Aquatic hyphomycete spore of the River Exe and its tributaries. Trans. Br. mycol. Soc. **61** : 331 - 346.

Miura, K. 1974. Stream Spore of Japan. Trans. mycol. Soc. Japan. **15** : 289 - 308.

Nilsson, S. 1964. Freshwater Hyphomycetes. Symb. Bot. Upsal. **18** : 1 - 130.

Petersen, R. H. 1962. *Anguillospora filiformis* Greathead. Mycologia **54** : 584 - 585.

Tubaki, K. 1957. Studies on the Japanese hyphomycetes. Ⅲ. Aquatic group. Bull. Nat. Sci. Mus. (Tokyo) **41** : 249 - 268.

Webster, J. 1959. Experiments with spores of aquatic Hyphomycetes. I. Sedimentation and impaction on smooth surfaces. Ann. Bot. **23** : 595 - 611.

Webster, J. & Descals, E. 1981. Ingoldian Conidial Fungi. In Biology of Conidial Fungi. Vol. 1 : 295 - 335. New York and London : Academic Press.

三浦宏一郎　1981. "菌類の採集と観察" : 83. 講談社サイエンティフィク.

付 Fig. 7

C. T. Ingold は，1942年に初めて水生不完全菌類の存在を紹介した，この菌類の第一任者ともいうべき研究者である。これは，彼が1975年の論文の最後に載せた図である。図の大部分は紀元前1800年頃のクレタ文明の遺物からとったコピーで，2人の人物は神に礼拝している。だがIngoldは図の中央に位置しているはずの神の姿を，水生不完全菌類の分生子のスケッチと置きかえてしまった。「妖精にも似たバレリーナのような分生子たちと，この絵の人物が一緒にバレエを踊っているところ」なのだそうだ。それほど彼は，この分生子の形の美しさにとりつかれてしまったらしい。

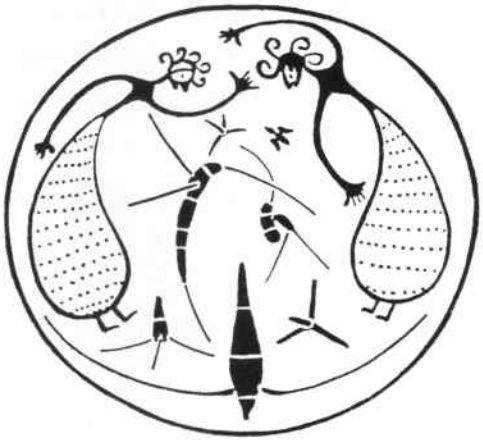
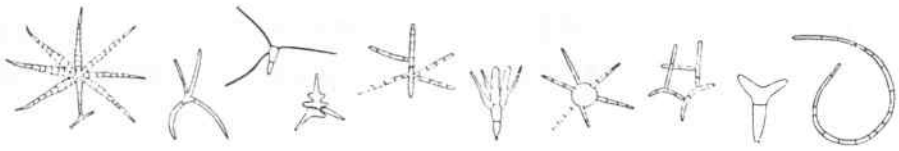


Fig. 7　Ingold, 1975より



茅野市八ヶ岳総合博物館紀要１：27－32（1991）

八ヶ岳西麓のカラマツ林における鳥類相

永　富　直　子＊

１．はじめに

八ヶ岳西麓の標高およそ1200m～1800mの山地はほとんどがカラマツの植林地で，この中にクリ，コナラ，ミズナラ，シラカンバ，カエデ類等の広葉樹が混在するかまたは部分的に雑木林を作っている。

近年さかんなリゾート開発はこの山地帯に計画されることが多い。地域によっては今後急激な環境の変化が予想される。そこで現存のこのような林において，出現する鳥の種類とと各種の個体数，季節によるこれらの変動を記録し，環境の変化に伴ってそれらがどのように推移していくかを継続して調べることを目的に，今回はその予備調査を行ったので，結果を報告する。

２．調査地の環境

調査は茅野市湖東の八方台（標高1850m）の北東面のふもとで，御射鹿池の南に面した尾根すじで行った（図１，２）。標高1528mの池畔を起点とし，およそ1590mまでの範囲に調査コースをとった。ちょうど低山帯の最上部に位置する。

調査コースの大部分はカラマツ植林地である。カラマツの胸高直径は20～50cm位のものが多い。高木層は他にシラカンバ，アカマツ，サワラが散在する。亜高木層にはミズナラ，ヤマウルシなどが少し混在している（図３）。低木層は全体に少ないが，レンゲツツジ，ノリウツギ，ツノハシバミなどがある。林床はヤマドリゼンマイとミヤコザサに覆われている。谷ぞいには部分的にミズナラ，シラカンバ，オオカメノキなどや灌木の茂る所がある。また標高1590m付近でカラマツ林はとぎれるが，亜高山帯針葉樹林はまだ出現せず，ミズナラ，シラカンバ，オオカメノキ，ウリカエデ等の広葉樹が主体の林になっており，アカマツとサワラが少し混じる。これより上部の林床には岩石が露出していた。

なお，調査地には12月半ばから積雪があり，１月末にはカラマツ林内で約50cmに達した。

３．調査方法

調査期間は1990年６月から1991年１月までの８ヶ月間で，６月－８回，７月－６回，８月－４回，他の月は各３回の調査を行った。調査はなるべく天気の良い日に行い，雨の日は避けた。調査開始時刻は，夏は７時～７時30分，秋～冬は７時30分～８時30分頃とした。調査方法は線センサス法で行った。調査したコースの距離は400mでここを30～40分かけて歩き，道の両側25m以内に姿または声を認知した鳥について記録した。野帳には，鳥の種

＊茅野市八ヶ岳総合博物館学芸員．

類，数，性別，声（地鳴きかさえずりか），最初に発見した場所（地点，樹種，高さなど）を記録した。また幼鳥や家族とわかるものや，巣材・エサを運んでいるなどを確認した場合はその旨を書き加えた。観察には7×35の双眼鏡を使用した。

図1


図2


図3

図1　調査地とその周辺の地形
図2　調査したカラマツ林（左手奥が八方台の裾野，左手前は御射鹿池）
図3　カラマツ林の植生

4．結果及び考察

センサス結果を表1に示す。

各月の全センサスで出現した種類を表2に示す。

(1)個体数の変動について

表1の個体数と表2の合計種数の変動を図4に示した。

6月から7月にかけて総個体数が大きく減少している。これは個体数が実際に減少したのではなく，雄のさえずりが少なくなることや雌の抱卵・育雛により記録されにくくなるためで，一般的な現象である。

8月から9月にかけ，出現した種類に大きな変化はないが総個体数がかなり増加している。これは主として巣立った幼鳥が記録されるようになったためと思われる。またカラ類（シジュウカラ科とエナガ科の鳥をまとめてさす）については混群を形成し始める時期であるため，1回の出現で記録される個体数が夏より多くなっている。

積雪時にはコガラとヒガラ以外の種はほとんど見られなくなり総個体数は最低になる。だがコガラの個体数は夏と大差がなく，この近辺で周年生活しているようである。

表1に示すように，8ヶ月間の合計個体数より算出した優占度は，コガラとヒガラの2種で50%以上を占める。これらは個体数が多いうえに，冬は他種がほとんど見られなくなってしまうためである。表2より，各月の出現鳥類の種構成は，6・7・8月，9・10月，11・12・1月のそれぞれが似たパターンを示している。そこでこの各期間における種優占度を算出し上位5種を図5に表した。11～1月はコガラとヒガラの優占度が合計で74%にもなるが，6～8月は45%程度である。しかし，なお3位以下の種に比べてこの2種の個体数は非常に多い。

表1　御射鹿池周辺カラマツ林のセンサス結果

種名＼年月	'90 6	7	8	9	10	11	12	'91 1	個体数*1 合計(羽)	優占度*2 (%)	出現回数(回)	出現頻度*3 (%)
コガラ	8	13	15	22	14	10	13	13	108	31.7	23	95.8
ヒガラ	10	4	11	6	7	22	10	4	74	21.7	20	83.3
ルリビタキ	4	1	3	5	7	3	—	—	23	6.7	11	45.8
シジュウカラ	6	1	1	7	5	—	1	—	21	6.2	12	50.0
エナガ	5	—	—	—	9	—	—	—	14	4.1	4	16.7
カケス	4	3	—	3	1	—	—	—	11	3.2	6	25.0
コゲラ	2	3	0	1	1	—	1	1	9	2.6	9	37.5
ウソ	—	—	—	—	2	2	4	—	8	2.3	4	16.7
メボソムシクイ	2	1	1	4	—	—	—	—	8	2.3	6	25.0
コルリ	5	2	—	—	—	—	—	—	7	2.1	5	20.8
アオジ	4	2	1	—	—	—	—	—	7	2.1	4	16.7
ヤマドリ	6	—	—	—	—	—	—	—	6	1.8	1	4.2
キクイタダキ	—	—	—	—	—	3	2	—	5	1.5	4	16.7
キバシリ	1	—	—	1	1	2	—	—	5	1.5	4	16.7
ホオジロ	2	2	1	—	—	—	—	—	5	1.5	5	20.8
ビンズイ	1	2	1	—	—	—	—	—	4	1.2	4	16.7
アカゲラ	—	—	1	1	2	—	—	—	4	1.2	3	12.5
ツグミ	—	—	—	—	—	2	—	1	3	0.9	2	8.3
アカハラ	—	1	—	—	—	—	—	—	1	0.3	1	4.2
ミソサザイ	—	—	—	—	1	—	—	—	1	0.3	1	4.2
カラsp.	2	2	1	3	5	2	—	—	15	—	—	—
不明	—	—	1	—	—	—	—	1	2	—	—	—
個体数合計(羽)	62	37	37	53	55	46	31	20	341	—	—	—

＊1．各月の個体数は3回のセンサスの合計で示す。ただし6～8月は，合計種数が多かった方から3回のセンサスの個体数を合計した。

＊2．計24回のセンサスの総出現個体数に対する，その種の出現個体数の割合。

＊3．計24回のセンサス回数に対する，その種の出現回数の割合。

表2　御射鹿池周辺カラマツ林の出現鳥類と出現月

種名＼年月	'90 6 (8)*	7 (6)	8 (4)	9 (3)	10 (3)	11 (3)	12 (3)	'91 1 (3)
コガラ	○	○	○	○	○	○	○	○
ヒガラ	○	○	○	○	○	○	○	○
シジュウカラ	○	○	○	○	○		○	
エナガ	○				○			
コゲラ	○	○		○	○		○	○
アカゲラ			○	○	○			
キバシリ	○			○	○	○		
ウソ		○			○	○	○	
カケス	○	○		○	○			
ルリビタキ	○	○	○	○	○	○		
コルリ	○	○						
アオジ	○	○	○					
ホオジロ	○	○	○					
ビンズイ	○	○	○					
メボソムシクイ	○	○	○	○				
センダイムシクイ	○							
キクイタダキ						○	○	
ミソサザイ	○				○			
ヤマドリ	○							
ヒヨドリ	○							
アカハラ		○						
ツグミ						○		○
合計種数(種)	17	13	9	9	11	7	6	4
センサスコース外の池周辺で声または姿を確認した種	ホトトギス ジュウイチ カッコウ・ツツドリ ウグイス・ウソ	ミソサザイ	ミソサザイ ウグイス ウソ ハシブトガラス	キジバト ハシブトガラス	メボソムシクイ ハシブトガラス ホオジロ カワラヒワ	カケス ベニマシコ		エナガ

＊（　　）はセンサス回数を示す。

(2)季節および環境と各種の出現状況について

出現頻度の高かった種は，留鳥以外ではルリビタキとメボソムシクイであった（表1）。

ルリビタキは漂鳥で優占度・出現頻度ともにカラ類の次に高く，出現した期間が6月～11月と長かった。毎回センサス区域内のほぼ同じ地点でさえずっている雄があり，9～11月には幼鳥が出現したが，この鳥は亜高山帯針葉樹林で繁殖するのが普通である。営巣を確認していないので何とも言えないが，調査地のカラマツ林内での繁殖も考えられる。

メボソムシクイは夏鳥で，これも亜高山帯針葉樹林に代表的な種であるが，センサスコースの最後の広葉

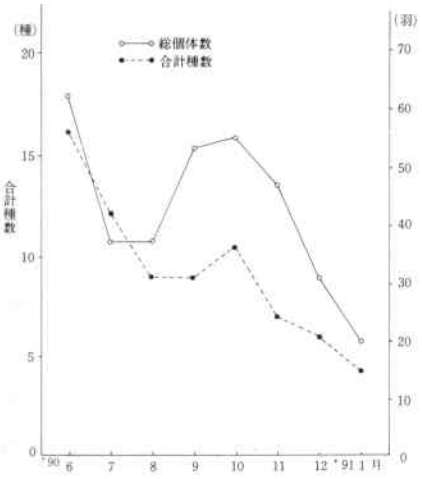


図4　御射鹿池周辺カラマツ林における出現鳥類の個体数および合計種数の変動

樹主体の区域にテリトリーを持つと思われる雄が1羽あった。9月には幼鳥らしい声も同時に近くで聞かれ，この付近で営巣した可能性がある。

コルリは夏鳥で，6・7月に集中してさえずりが聞かれた。この鳥は一般に低山帯の低木層の多いうす暗い林を好む。本調査地でも，コルリの多くは高木層が優占している場所ではなく，谷すじのミズナラ等の広葉樹と灌木の茂った所でさえずっていた。そのような環境はカラマツ林には部分的であるが，そこをテリトリーの一部に含めて生活しているようである。

漂鳥のキバシリとウソはそれぞれ6月と7月に記録された後2ヶ月間出現せず，秋から冬に再び連続して出現した（表2）。キクイタダキは11・12月のみ見られたが，この3種は夏は亜高山帯針葉樹林で繁殖し冬は低山へ降りて過ごす鳥である。調査地一帯はこの中間地点にあたるか越冬地になっていると考えられるが，それぞれがどちらであるかははっきりしない。

表2に示した「センサスコース外で確認した種」は，池のふちや車道に面した林縁部，池の流入水が流れるブッシュ，コースより奥の山林などで主に声が聞かれた。御射鹿池周辺を全体としてみると，いろいろな環境を含み，鳥類相もかなり豊かである。

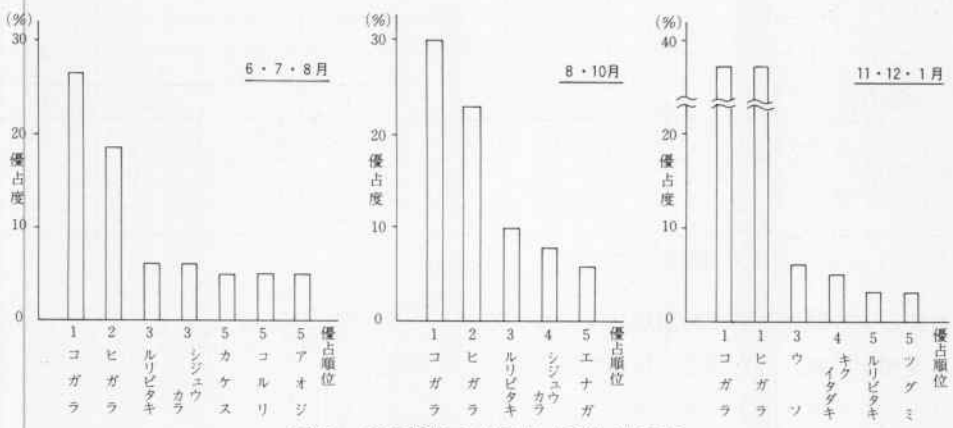


図5　各期間における優占種上位5種

5．まとめ

調査したカラマツ林は，冬も留まっているコガラとヒガラの優占度が非常に高かった。しかし植林地にしては，夏から秋にかけて予想以上に多くの種が出現した。カラマツ林内に部分的にある広葉樹や灌木の茂った場所を利用している種もあった。

調査地は低山帯の最上部に位置しており，鳥類相に亜高山帯針葉樹林の要素がみられた。ルリビタキ，メボソムシクイは一般に亜高山帯針葉樹林で繁殖する種類であるが，調査地においても繁殖した可能性がある。また低山と亜高山帯針葉樹林の間を移動するキバシリ，ウソ，キクイタダキが出現した。これらについては次年度，繁殖や季節による移動状況を

明らかにしたい。

今回の調査はセンサスコースが短く，カラマツ林の鳥類相を把握するには不十分であった。次年度はカラマツ林内のコースをより長くとり同様の調査を継続すると同時に，亜高山帯針葉樹林の出現する標高まで上るコースを設定し，植生と鳥類相の関係についても調査を行いたい。

6．参考文献

牛山英彦　1988．八ヶ岳山麓二次林における鳥類群集(1)．自然研究紀要，**23**，78－84．

―――．1989．同上(2)．同上，**24**，89－91．

―――．1990．同上(3)．同上，**25**，77－82．

牛山英彦ほか　1978．鳥類．諏訪の自然誌・動物編，169－313．諏訪教育会

臼井勝之ほか　1983．平塚市博物館資料 No.29　平塚鳥類誌．平塚市博物館．

中村登流　1982．冬を迎える野鳥たちの生活ぶりをのぞく．山と渓谷，**550**，84－85．

羽田健三（監修）1987．長野県野鳥図鑑．信濃毎日新聞社．

羽田健三（監修）1987．野鳥の生活．筑地書館．

保坂四郎　1981．諏訪地方相観植生図．諏訪の自然誌・植物編，付図．諏訪教育会．

キクイタダキ（ヒタキ科ウグイス亜科）

体長10cm，体重5g（10円玉1枚位）の重さの，日本で最小の鳥。頭に菊の花びらのような黄色の模様をつけているところからついた名です。オスではここが赤味を帯びています。体は全体的にうぐいす色で「ツリリリー」と高く細い声で鳴き，見つけにくいですが，亜高山帯針葉樹林に代表的な鳥です。冬は低山に降りて来て過ごします。

写真のキクイタダキ（メス）は，秋にどうしたことか岡谷の町中で死んでいたのを小学生が見つけ，野沢進之輔先生が当博物館へ資料として譲って下さったものです。

茅野市の「市花」はリンドウ，「市木」はシラカバ。でも「市鳥」がありません。ちなみに，大町市の市鳥はライチョウです。八ヶ岳の裾野に位置する茅野市は，亜高山帯針葉樹林の占める面積が大変広いと言えます。そこに住むキクイタダキこそ最有力の「市鳥」候補であると，博物館では一同確信しています。　〈文―永富直子，画―竹中敏（日本野鳥の会諏訪支部）〉

《昭和63年度事業》

主な事業

(1) 工事関係（竣工月日）

①本体・空調・給排水・電気工事（5月30日）

②展示工事（9月30日）

③その他　陶壁画工事（8月30日）　外構工事（9月30日）

屋外トイレ工事（10月20日）　文芸の森整備工事（10月20日）

駐車場舗装工事（10月22日）　案内標識設置工事（12月26日）

展示ケース設置工事（3月30日）　リニア模型展示工事（3月31日）

(2) 民俗資料館資料　総合博物館へ移転　6月30日～7月8日

(3) 「博物館だより　創刊号」　9月30日発行　茅野市内全戸配布

(4) 竣工式典　10日25日

(5) 無料公開　10月25日～10月30日（期間中入館者　7,015名）

(6) 開館記念親子でたのしむふるさと講座（茅野市公民館と共催）

①八ヶ岳の動物たちの生活　11月12日(土)

講師：両角　徹郎氏　日本哺乳学会

受講者数　24名

②ふるさとの玩具　（実際につくって遊びましょう）

講師：田中　一男氏　（玉川粟沢）

受講者数　23名

③ふるさとの民具

講師：松沢　かね（職員）

受講者　25名

④ふるさとの民具（はた織りなどを体験してみましょう）

講師：松沢　かね（職員）

受講者数　21名

⑤しめかざりの製作（これで正月の準備は大丈夫）

講師：矢崎　正文氏　（宮川新井）

(7) 文化財防火査察及び消化訓練　1月26日

(8) 開館記念講演会

・と　き　2月5日(日)　午後2時～3時30分

・演　題　「シルクロート取材の旅」―日本文化のルーツを探る―

・講　師　野口　篤太郎氏　NHK研修センター　チーフディレクター

・聴講者数　約200名

(9)　その他

①日本博物館協会・北信越博物館協議会・長野県博物館協議会への加盟

②博物館法（昭和26年法律第285号）第10条の規定に基づく，博物館の登録

登録番号　第36号

登録年月日　平成元年２月28日

③昭和63年度博物館建設事業補助金　20,000,000円

《平成元年度事業》

主な事業

(1)　ふるさと講座

①探　鳥　会

５月28日(日)　竜神池周辺　75名

講師：牛山英彦氏（東部中）　野沢進之輔氏（豊平小）　飯沢　隆氏（玉川小）

②霧ヶ峰の植物観察会

８月３日(木)　車山から八島ヶ原湿原　38名

講師：阿部義男氏（博物館専門委員）

③正月の遊び道具を作ろう

12月３日(日)・12月10日(日)　41名

タコ・竹トンボ・ラッカサンなど作製　　講師：田中一男氏

④海藻からとこてんを作ろう

１月21日(日)　35名

講師：松沢かね（職員）

⑤古文書解読講座

12月３日～２月25日（12/24・12/30・１/7を除く日曜日）

計10回　47名

講師：細田貴助氏（博物館専門委員）

(2) 特別展

①**発明工夫展**　10月5日(木)～11月5日(日)

市内小中学生の作品（絵画・工作・研究）　124点

②**民俗資料収蔵品展**　11月10日(金)～11月30日(木)

「編む・織る」をテーマに収蔵資料を展示　約200点

渡辺正晴氏による「ねこ掻き」の実演

(3) 植栽　（屋外自然形成）

《平成２年度事業》

主な事業

(1) ふるさと講座

①**初夏の探鳥会**　5月12日(土)　5月13日(日)

竜神池周辺の野鳥の観察　51名

講師：牛山英彦氏（本郷小）　滝沢智子氏（北山小）　永富直子（職員）

②**冬の探鳥会**　12月15日(土)　12月16日(日)

諏訪湖畔の水鳥の観察　40名

講師：小口妙子氏（信濃野鳥の会）　永富直子（職員）

③**植物観察会**　7月22日(日)

八ヶ岳の植物観察会　46名

講師：阿部義男氏（博物館専門委員）

(2)古文書解読講座　9回　30名

古文書を読む―歴史への遭遇

講師　細田貴助氏（博物館専門委員）

(3) 博物館活用指定学級（博物館遊学教室）

永明小学校4年1部35名と泉野小学校3学年16名を指定

第1回　8月29日　泉野小　8月30日　永明小

竹細工を作ろう

「便利孫の手」を作る　講師：田中一男氏

第2回　12月19日　泉野小・永明小

上川のカモを見よう　講師：永富直子（職員）

第３回　１月17日　　泉野小　１月18日　永明小

寒天の歴史　　講師：藤森明氏

第４回　２月７日　泉野小　２月８日　永明小

こわしてみよう教室（自転車）

講師：田村和郎館長

第５回　２月21日　泉野小

２月27日　永明小　４年生全員　106名

粘土の鈴作り　講師：戸田外史（職員）

(4) 特別展

①宮崎学写真展（土門拳賞受賞者）

７月25日 ～ ８月17日

ふくろうと伊那谷の動物たち

②発明工夫展

10月14日(日) ～ 11月３日(土)

市内小中学生の作品（絵・工作・研究）　130点

②民俗資料収蔵品展

11月11日(日) ～ 11月30日(日)

動く動具のカラクリ（力と仕事―先人の知恵）

④浮世絵展（保科政人コレクション）　180点

１月４日(金)～１月31日(木)

江戸の民俗と美

(5)その他

①ミュージアムコンサート　５月19日(土)

教育委員会・博物館共催で東京ゾリステンのコンサート

博物館ロビーで開催　250名

②生涯学習フォーラム

10月１日(日)

第三分科会（博物館・考古館・美術館をどのように活用したらよいか）

をテーマに話し合う

③博物館だより発行　２回

④研究報告（紀要）発行

⑤優良映画鑑賞会（教育委員会と共催）

２月３日(日)「タスマニア物語」２回上映　700名

⑥植栽　サツキ500本，ツツジ50本，その他雑木

博物館施設の概要

一、施設の概要

1. 名　　称　茅野市八ヶ岳総合博物館
2. 所 在 地　長野県茅野市豊平6983番地
　　〒391-02　0266-73-0300
3. 敷地面積　26,610.59 ㎡
4. 建築面積　2,292.921㎡
5. 延床面積　3,342.11 ㎡
6. 構　　造　鉄筋コンクリート造一部鉄骨造・
　　鉄骨鉄筋コンクリート２階建、塔屋１階
7. 設　　計
　建築事業設計監理　大建設計・矢島建築事務所共同企業体
　展示工事設計監理　株式会社丹青社
　外構工事設計監理　大建設計・矢島建築事務所共同企業体
　屋外トイレ工事設計監理　有限会社矢島建築事務所
8. 施　　工
　建築工事
　杭打工事　株式会社丸清建設
　建築主体工事　株式会社田村建設
　電気設備工事　南新電気工業株式会社
　空調設備工事　須賀・水道・共進建設共同企業体
　給排水衛生設備工事　有賀水道・諏訪設備工業建設共同企業体
　展示工事　株式会社丹青社
　用地造成工事　栄工・東建設共同企業体
　駐車場整備工事　栄工建設株式会社
　外構工事　株式会社田村建設
　屋外トイレ工事　有限会社成武建設
9. 施　　設

1	階	特別展示室・講堂	187.09㎡	整理・工作室	44.25㎡
		第２展示室	143.90㎡	燻蒸室	11.88㎡
		準備室	25.60㎡	第１収蔵庫	89.38㎡
		館長室	25.80㎡	第２収蔵庫	360.88㎡
		事務室	38.48㎡	荷解室	94.14㎡
		閲覧室	51.81㎡	設備機械室	171.04㎡
		研究室	52.74㎡	エントランスホール	289.99㎡
		市史資料室	26.04㎡	風除室	25.26㎡
2	階	第１展示室	972.99㎡	機械室	52.56㎡
		休憩コーナー	36.46㎡		
塔屋		展望室	42.23㎡		
その他					599.59㎡
計					3,342.11㎡

二、建設経過

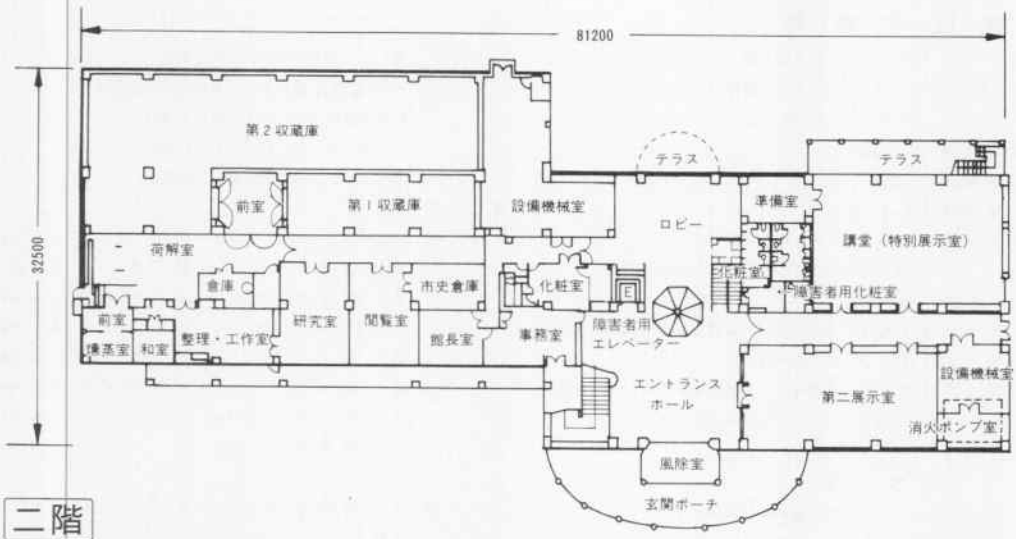
昭和57年７月22日　総合博物館研究調査委員会発足（委員15名、顧問３名）同委員会に「茅野市が建設する総合博物館について、その基本構想はどうあるべきか」を諮問
昭和58年３月８日　上記諮問に対し、自然・人文の総合博物館とする等を答申
昭和59年５月８日　総合博物館資料調査研究委員委嘱
昭和59年７月13日　総合博物館の建設用地を豊平下古田地籍に決定
昭和60年１月７日　総合博物館展示専門委員の委嘱
昭和61年１月22日　用地売買契約（土地開発公社が代行買収）締結
昭和61年６月16日　公社より用地取得
昭和61年６月18日　造成工事起工式
昭和61年７月28日　展示指名設計協議を行い選考委員による審査の結果㈱丹青社に決定
昭和61年９月８日　展示設計契約
昭和62年３月31日　展示基本設計完了
昭和62年４月１日　八ヶ岳総合博物館準備室設置
昭和62年６月１日　建築工事杭打ち着工
昭和62年７月４日　建築工事起工式
昭和62年８月31日　展示実施設計完了
昭和62年９月17日　展示工事契約
昭和63年３月５日　建築工事上棟式
昭和63年４月１日　博物館係発足
昭和63年５月30日　博物館本体工事完成
昭和63年６月10日　博物館職員市役所準備室より博物館へ移動
昭和63年９月30日　外構工事完成
昭和63年９月30日　展示工事完成
昭和63年10月20日　屋外トイレ工事完成
昭和63年10月22日　駐車場工事完成
昭和63年10月25日　茅野市八ヶ岳総合博物館竣工式、開館

三、建設費

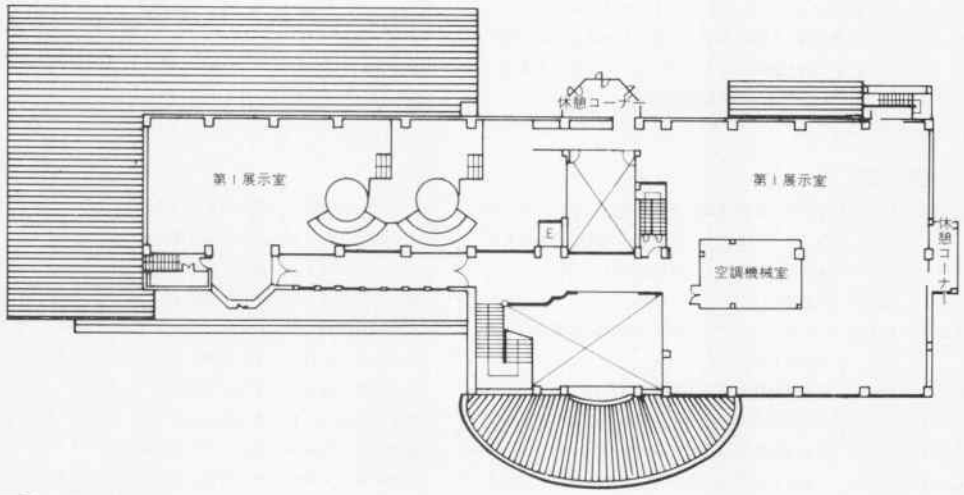
用地費	151,423千円	公園施設整備費	72,721千円
造成費	152,900千円	その他	20,466千円
進入道路費	158,444千円		
博物館建設費	1,108,309千円	合計	1,664,263千円

各階平面図

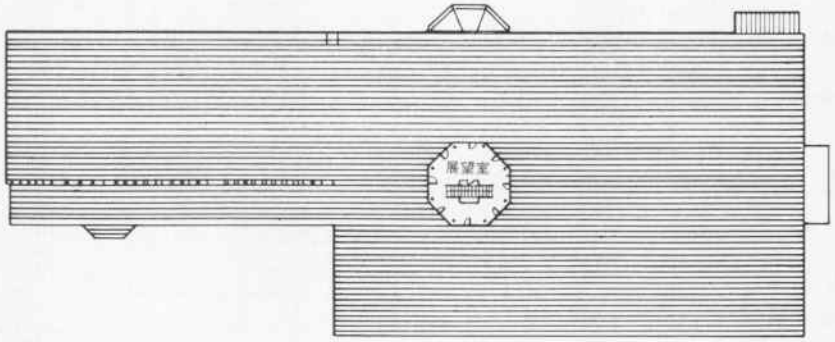
一階



二階



塔屋



茅野市域史古代略年表試案

時代区分	西暦	和暦	茅野市域関係事項　（　）内は主な遺跡名
古墳時代	300		●このころ濃尾系土器が入り土師式土器が出現。(下蟹河原・和田)
			●このころ畿内勢力が次第に力を強め，統一がはじまる。
	400	雄略	●沖積低地に農業集落が発達していく。(一本椿・和田・下蟹河原)
			●このころ古式古墳の狐塚がつくられる。（高部狐塚古墳）
			●古東山道の峠に祭祀遺物を残し，神坂峠・入山峠等から出土する。
	600	推古	●装飾太刀・馬具・須恵器等を副葬した横穴式古墳が盛んに造られる。
飛鳥時代	646	大化 2	●科野国が成立し，郡制により諏方郡となり，郷が編成される。
	648	大化 4	●エゾに備え越後に磐舟柵をつくらせ，信濃の民を移す。
	672	弘文 1	●壬申の乱が起り大海人皇子，使を遣わして信濃の兵を集める。
	684	天武12	●天武天皇，三野王らを信濃に遣わして地形を調べ地図をつくらせる。
	691	持統 5	●朝廷が勅使を遣わして須波神らを祭らせる。
	700	文武 4	●諸国に牧地を定め，このころ信濃の諸牧も開かれる。
	701	大宝 1	●古東山道にかわり保福寺峠をこえて国府に至る令制東山道を整備。
奈良時代	712	和銅 5	●「古事記」ができ，国ゆずり神話に州羽と建御名方神が登場する。
	714	和銅 7	●信濃国ほか3国の民が出羽柵戸に配備させられる。
		和銅 7	●須芳郡の主帳が須芳山嶺道をつくった功績で正八位を授けられる。
	721	養老 5	●信濃国を分けて諏方国を置き，美濃の按察使の管下となる。
	724	神亀 1	●配流の遠近の程が定められ，諏方国は都より560里で中流国となる。
	731	天平 3	●諏方国を廃して信濃国に再び併合する。
	738	天平10	●東山道など諸道諸国の健児をやめる。
	757	天平宝字1	●太宰府の防人に東国の兵士を送るのをやめて，西国兵士をあてる。
	765	天平神護1	●「神功開宝」が鋳造され，高部の乞食塚古墳より出土する。
平安時代	801	延暦20	●坂上田村麻呂将軍が東征に諏訪明神の加護をうけたと伝える。
	806	大同 1	●諏訪上社大祝に有員がなり，諏訪社の式年造営が始まると伝える。
	815	弘伝 6	●最澄，東国布教のとき諏訪明神の加護をうけ，信濃大山寺へもよる。
	927	延長 5	●「延喜式」が完成，諏訪郡の南方刀美神社二座は名神大とある。
	937	承平 7	●このころ「和名抄」を編纂，諏訪郡の山鹿・神戸・桑原の郷名記載。
	940	天慶 3	●諏訪社の建御名方富命神に正一位，八坂刀売命神に従一位が叙される。
	1056	天喜 4	●前九年の役に上社大祝為仲，源義家について従軍する。
	1180	治承 4	●木曽義仲，平家討伐に挙兵し甲斐源氏も諏訪明神の加護で討つ。
	1184	寿永 3	●木曽義仲，義経軍に破れ近江粟津ヶ原で討死，千野光弘らも討死。

ら地方豪族に官位のしるしとして下賜されたものともいわれるし、または東国に配置された伴造的国造、そして物部氏系統の人物が多く所持していたとの説など諸説がある。

この太刀を出土した蛇塚古墳が、七世紀末から八世紀初頭のものとされているので、かなり中央政権と親密な関係になっていた人物に下賜された儀仗刀であったともみられる。

ただ気になるのは、諏訪明神となる大祝神氏の居館のあった前宮神殿から方位的には北東、つまり丑寅の鬼門に当る位置にこの古墳があったということが何を意味するかであり、必ずしも、中央と親密な関係を結び、下賜されたものともいえない。

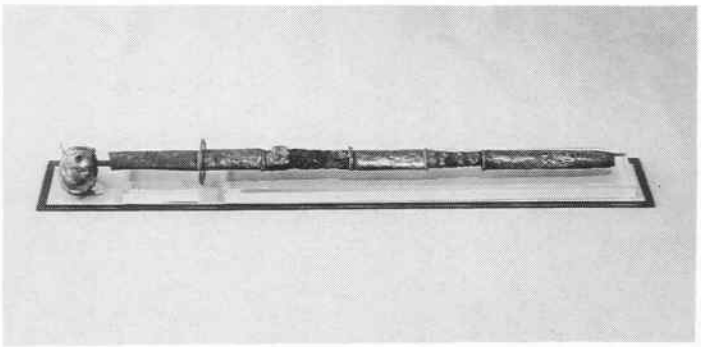
もし、物部氏系統の性格を有するものであれば、物部守屋大連が佛教をめぐっての対立で敗死後に、諏訪へ逃亡してきた子孫の武麻呂（一には弟君）なるものが、神長の養子になったとの神長官守矢家の系譜上の伝承に関連したり、同家の一子相伝の呪文が物部氏系の祝詞と共通性があるとする説など、興味深くなるが確証となるものは何もない。

ともかく、壬申の乱における天武朝と諏訪との関係、また次の持統朝になってからの勅使派遣による「須波神」の祭祀が諏訪神社の成立につながっていたのかという問題なども、この地域の古代史として解明していかなければならない大きな課題である。

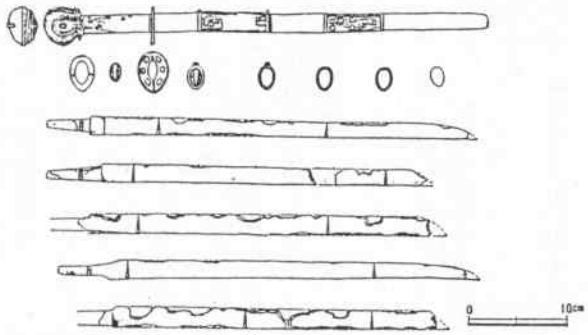
また八世紀には、茅野市域内にあったとされる山鹿牧・塩原牧の官牧から中央へ馬を貢上していたことも文献上は明確であるのに、その牧の位置範囲については依然、推定の域を出ないままであり、馬具を多く副葬している平担地の古墳との関連づけも説得力に乏しい。

今後の考古学的な調査による新たな資料の検出に期待するところ大であるが、同時に悪戦苦闘しながらも、あくなき推論と仮説に挑戦し、奥深いこの地域の歴史の森にわけ入っていこうとする人たちが、広がっていくことを望まずにはいられないのである。

（未完）



八ヶ岳総合博物館展示の頭椎太刀



蛇塚古墳出土の頭椎太地と直刀　〈「茅野市史 上巻」(1986) より〉

＊茅野市八ヶ岳総合博物館専門委員（歴史）

昨年十月、明治大学の歴史・考古・民俗を専攻する教授陣が地方へ出張して開く「公開大学・学外集中講座」というのがあって、その第一回の「日本文化の古層」というテーマでの講座が諏訪で開催され、私も参加した。

そのとき、私は日頃から胸にうずいている諏訪の古代史のいくつかの疑問や研究課題について質問させてもらった。そのうちのひとつは、諏訪に関係の深い金刺氏の系図につながる『阿蘇氏系図』の信憑性と史料的価値の問題について、古代文献史学専攻の吉村武彦教授にお尋ねをした。

回答は翌年までお預けということになっているが、この系図は昭和三十年に皇学館大学教授の田中卓氏が究明した『異本阿蘇氏系図』のことで、五年後に「古代阿蘇氏の一考察」という論文で発表されたものである。

以前から問題にはされていたが、充分な資料批判もなく、安易に引用している傾向が目立つので、明確にその史料的価値を問う必要があると思っていたからである。

これには、諏訪大神大祝や諏訪評督（郡領の前称）・郡領・少領を務めた人間は金刺氏の系譜につらなるもので、それは科野国造も務め、たどっていけば、九州の阿蘇氏に属する系統になると記述されており、諏訪としては無視できない重大な系図である。

もし、そうだとなれば、諏訪の古代史は大きく書きかえられ、新たな史料的根拠を得て、さらに展開が試みられるから、あいまいにせずに、現時点でのみきわめをつけなければならない。

最後にもうひとつ提起をすれば、諏訪大社前宮の境内地内の蛇塚古墳から昭和三十五年に、ほぼ完形のまま出土した「金銅装頭椎太刀」の性格と、所持した人物像の問題である。

この古墳は大正七年にも発掘したことがあるといわれていたが、旧宮川村史編纂のための資料収集で発掘され、出土品は宮川小学校と編纂会責任者の今井野菊さんに分散して保管された。

昭和五十七年に今井さんは亡くなられたが、まだ床のうえでお元気だった頃、私を横井病院に呼び出し、今までとても大事にしてきたが私蔵していてはいけないものだし、さりとて正式の発掘でないものを世に出して騒がれてもいやだから、市の方へ内密に受け取ってもらうよう話して、やがて博物館が茅野市にできたら、陳列してほしいから頼むと、ガラス箱に納めたまま手渡され、託されたのがこの太刀であった。

私達は早速、市長さんにその旨を話し教育委員会に相談して、尖石考古館の収蔵庫に保管、その後に奈良国立文化財研究所で保存処理をして、いま八ヶ岳総合博物館の展示ケースの中で金色に輝いている立派な太刀がそれである。

よくみると柄と鞘のところに薄金を巻いて毛彫りの唐草状の文様がみえ、細かい装飾もあり、とてもこの地方でつくられたものではない。

専門家にいわせると、この種の太刀は、畿内の中央政権か

きた道で、エゾ征討に往還した都からの通路でもあった「古東山道」も、この近くを通っていたに違いないことである。

昭和六十一年に「長野県東山道研究調査会」が発足し、その後、通過関係七県から一都十二県に発展して「東山道サミット」を開いて研究交流を深め、昨年は本市の八ヶ岳総合博物館に内外の研究者、約百余名が参集して「古東山道研究会」が開催され私も研究発表に参加した。諏訪ルートとして杖突峠＝横内・塚原・矢ヶ崎の通過説には確信をもっている。

近くの小字名「一本松」と呼んでいるところに、「一の坪」または「一ノ壺」という古地名があったが、これは明らかに古代の条理制地割によって道路・水路・畦畔などを整備した事業にちなんでつけられた歴史的地名ではないかと思われる。

律令体制下において、班田収授法を円滑に進める目的で施行され、一辺六町（約六五四ｍ）の正方形の一区画を東西に一条、南北に一里と称して、一里はさらに一辺一町（一〇九ｍ）の正方形を三十六の小区画に分けて、「一の坪」から「三十六坪」まで並行式か、あるいは千鳥式に番号地名がつけられ、各坪も半折形、または短冊形に十等分されて「一段」と呼ばれる単位の耕地を構成していたというのが条理制で、最近各地で発掘確認され、貴重な遺構として明らかにされつつある。

また、それに関連して、古代諏訪郡の行政の府であった「諏訪郡家」、または「諏訪郡衙」の存置のゆくえである。

かつて先学・伊藤富雄氏の研究によれば、諏訪郡家は横内の達屋社周辺に比定して、その遺構の推定を展開されたが、確かにその可能性はある。

私は最近の官衙・郡衙の発掘例や唯一の文献史料である「上野国交替実録帳」などから郡衙の構造・規模を推して考えてみると、意外に広範囲に施設配置が及んでいたように思われる。

建物の機能・構成からみて、まず行政の執務関係の建物、また中央へ上納する租税や出挙の利息として徴収した稲などを収蔵しておく倉庫群、それらの輸送運搬に必要な馬の厩舎、さらに国司などの役人が往来する際の宿泊施設であったとされる「館屋」、そして郡衙の政庁に務める郡司らの官舎など、実に多用な施設を必要としたようである。

いまそれらを地域の中に場所を特定することはできないが、少くも横内から塚原・本町（矢ヶ崎）にかけての地帯は、面として重視し、調査されなければならないところではないか。

またここに郡衙が存置されていたとするならば、大領・少領・主政・主帳の四等官からなる郡司は誰であったのか。大領・少領は郡領と呼ばれ、地方豪族の中から現地任用をしていたというが、それはどういう系統の人であったかも、大きな問題である。

から古墳時代へ時代が転換する時期である。下蟹河原出土の土師器は、今もこの種の土器の編年研究には欠かせない指標的な資料として重要視されている。

昭和六年に発掘されたこの遺跡の発見と調査の経緯や所見は、先学・藤森栄一氏（一九一一～一九七三）が論文（「信濃下蟹河原に於ける土師器の様式」-雑誌「考古学」十巻十一号一九三九年）で書き残している。その基礎資料になったものは、近くの一農民でありながら独学で高度な測量技術を身につけていた、ちの駅前の矢島数由氏（一八九四～一九六五）の発掘記録と精確な測量図によっていることは注目にあたいする。

矢島氏の記録を、私もかつて一度見たいと探していたところ、思いがけない機会に、諏訪市美術館の奥の片寄せられた棚に、ほこりにまみれたこの遺跡と遺物の見取図があるのを発見、何とかしたいものと関係者に要望したことがあった。

昨年の十月、尖石遺跡が学会に報告されてほぼ百年、宮坂英弐氏が集落研究で本格的に発掘をはじめられて五十年の「特別企画展」が開かれた。そのとき、宮坂氏の発掘を助けた人々のひとりとして、矢嶋数由氏が生前に収集した遺物・標本から測量図、未公開の自作の研究記録「如雲諏訪史抄」十数冊などとあわせて、その功績が紹介され、多くの人々に感銘を与えた。

そして宮坂氏の発掘に関した多くの測量を手がけ、中央へ発表する論文の作図も報酬を度外視して引き受けるなど、矢嶋氏は宮坂氏の偉大な発掘や研究活動を陰で支えた功労者であった。

地域史をまとめるのに、中央の専門家の指導をお願いしたり、資料あさりに奔走するのも必要だろうが、もっと足もとをみつめ、こうした「地の塩」のような埋れた人に光を当て、またこの地域の人自身による素人の研究にも温かい目を向けて、大事に掘り起していくような姿勢こそが求められている。

下蟹河原遺跡については、以前から個人的にも関心があり、感慨をもっていたので少し書いたが、とにかくこの遺跡の周辺から永明寺山麓にかけての地域は、諏訪地方でも農耕が最も発達した地域のひとつで、間もなく畿内を中心に成長し、全国統一に向う大和王権の波も及んできて、その前進基地的な役割を担った地帯としても重要なところであったのではないかと推定している。

しかし、前述したようにこの地域の開発も急速に進んで地形や景観も大きく変貌し、埋蔵不明のまま遺構が消えている、あるいは消えようとしている。

宅地化して人家の下になったり、あるいは道路敷の下になっているのはやむを得ないが、区画整理事業のように土地の形態を大きく変更するような場合には、埋れた遺構には細心の注意を払いたいものである。

さらにこの地域は、大和王権が東国に地方支配を広げて

りに大まか過ぎるとか、また資料の考察についても、著しく個別実証的になってしまう傾向が考古学にはつよいという問題がある。

こうした点を直視して、両者がお互いの長短を補いあいながら、それぞれの方法と成果を有効に生かして歴史の究明に当ったならば、もっと科学性に富んだ地域史の復元ができるのではないかと思われるのである。

文献史学のみでは究明しがたい民衆の生活史的側面を明らかにする点でも、考古学は旧来の守備範囲にこだわらず、広く中世から近世にまで及んで、その役割が発揮できるようにすることが望ましい。

とにかく、歴史は科学であり、学問である以上、常に書き変えられることは当然であり、真理の追求の前には、縄張りも権威主義も無用ではないか。

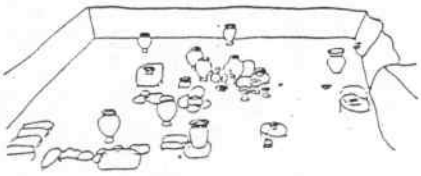
ところで、古代・中世・近世といった時代区分の仕方であるが、これは主として歴史の変化・発展を社会構成体の継続的交替とみる史観によったものである。

そしてこれらの各時代区分に対応して、さらに細分化する区分として時期区分を設けるが、それには政権の所在を中心にした区分である古墳・飛島・奈良・平安・鎌倉・南北朝・室町・戦国・安土桃山・江戸といった小時代を、それぞれにあてはめた併用法をとる方が、一般にはわかりやすく、親しめるのではないか。

そこでまず地域史のうちの古代について感じていることを若干述べてみたいと思う。

古代以降を歴史時代として、飛鳥時代のはじまる大化元年（六四五）からを「古代」としている考え方もあるが、今日では古墳時代までさかのぼって、それ以降から平安時代に至る範囲、つまり平家滅亡（一一八五）の十二世紀末までが適当ではないだろうか。

茅野市域における古代のはじまりは、これまでの土着的な櫛目文で飾られた土器に代って、新たに登場してきた土師器を最初に出土した横内の「下蟹河原遺跡」の時代、つまり弥生時代



信濃下蟹河原の土師器埋没状態

下蟹河原遺跡出土の土師器

藤森栄一（1939）「信濃下蟹河原に於ける土師器の一様式」考古学10－11より〉

発掘は確かに遺跡調査の最も基本的な手段・方法ではあるが、発掘によって失われるもの以上の成果をあげるのでなければ、それは明らかに合法的な破壊行為にもなりうるという自覚を、行政も担当者も肝に銘じている必要があろう。

そして、もの言わぬ考古資料に大いに歴史を語らせるには、考古学独自の研究方法によるだけでなく、関連する他の研究成果をも総合してみていくことが歴史復元には欠かせない。

また、現在用いられている「時代区分」、「時期区分」、「画期」にしても、遺構や遺物を分類して「型式」による相対的な年代を編年し当てはめて判定することが一般的に行なわれている。それによって年代差はわかるだろうが、しかし、その型式の土器や石器が、どのくらいの間、使われていたかの年数は一定ではないので、今から何年前のものかという実年代（絶対年代）を知ることは正確にはできない。

そこで登場してきたのが、放射性炭素測定などの理化学的方法を応用しての遺物の年代測定法であろうが、いずれにせよ、これまでの考古学の中で伝統的に形成されてきた個別実証的な研究方法のままでは限界にきている。

これからも、資料分析の方法は、ますます進展し多彩なものになっていくことだろう。要は「人間の歴史」として、この地域に生きた人びとが経験してきた社会現象を総合的に把握することができ、しかも、ここの地域史の復元にも役に立つような新しい方法論の確立が、いま強く望まれているのである。

三、古代史への問いかけと課題

古代・中世に関しての地域史料は、ほとんどないに等しいか、あってもごく限られたものになるので、どうしても「中央史」に頼らざるをえなくなる。

諏訪には、地方としては珍しく割合に多数の古史料が残っているといわれているが、あってもせいぜい鎌倉時代以降のもの、それも長野県宝指定の「紙本墨書・守矢家文書」にみられるように主たるものは南北朝時代以降の中世史料である。

そんなわけで、いきおい「中央史」によって補わねばならない部分も多くなるが、それは都を中心とした特定の人々や限定された地域での記述が主で、地方の生活や状況を知ることのできるような古記録・古文献類は、極めて乏しいのが実状である。古史料があったとしても、すべてが客観的に正確に記録されているとは限らず、厳密な史料批判も、考証も必要となるから、勢い地域史における古代・中世の研究記述には、いくつもの障壁が避けられない。

そんな場合に考えられるのは、文献資料に依拠している文献史学的な方法ばかりでなく、遺物・遺跡を中心資料として調査・分析をする考古学的方法を併用するということである。

ただこの方法にも、資料の絶対年代（実年代）の推定が余

茅野市域史原始略年表試案

時代区分	年代	時代区分	茅野市域関係事項　（　）内は主な遺跡名
先土器時代	B. C. 20,000	後期	●狩猟・石器製作で白樺湖周辺に人間が出現。（対山館）
	B. C. 15,000		●冷山の黒曜石原産地近くに石器製作址が発達し，ナイフ形石器をつくり槍先形尖頭器が出現。（渋川遺跡群）
			●良質な和田峠産の黒曜石を多用するようになる。(御小屋久保)
	B. C. 10,000		●ナイフ形石器の消滅から細石器文化へ移行。(御座岩岩陰ほか)
縄文時代		草創期	●槍から弓矢へ，石鏃が出現し，土器製作もはじまる。
			●洞穴や岩陰を住居とする。(栃窪岩陰)
	B. C. 8,000		●特異な形状の有茎尖頭器の文化が広まる。(与助尾根・金鋳場)
		早期	●器形は尖底深鉢の押型文・撚糸文の土器文化が発達し，竪穴住居が出現，定着性を増す。(ビワ石・御座岩岩陰ほか)
	B. C. 4,500		●石鏃が多量に出土するようになる。(本町棚畑)
		前期	●東海系の土器文化が入り，集落を形成する。(高風呂・棚畑)
	B. C. 3,000		●縄文中期土器の基礎となる下島式土器がつくられる。(下島)
		中期	●遺跡が八ヶ岳山麓で爆発的に増加し集落も大形化。(尖石・長峰)
			●黒曜石の原石・製品の搬出が盛んになり，土器が大形化。(一ノ瀬)
			●植物性食料の加工具が多くなり，原初農耕のはじまり。(和田ほか)
			●土偶や石棒の祭祀が盛んになる。（岩陰・長峰）
			●竪穴住居の拡張・建て替え・住み分けをするようになる。(和田)
			●琥珀製や硬玉製の飾玉を身につける者が出現。（中原）
	B. C. 2,000		●気候の冷涼化により，八ヶ岳山麓の遺跡が減少しはじめる。
		後期	●集落が小規模化し，遺物の破片，土坑が多くなる。(下ノ原・高部)
	B. C. 1,000		●八ヶ岳山麓の遺跡数が激減する異常事態になる。(上ノ段)
		晩期	●集落が山麓台地から沖積低地に移動し拠点集落が発達する。
	B. C. 300		●茅野市域にはじめてコメの存在を認める。（御社宮司）
	B. C. 100	中期	
弥生時代	A. D. 100		●磨製石鏃が多く，扁平片刃石斧が使われる。(棚畑・宮ノ上)
		後期	●千曲川水系の文化との接触をもつ遺跡がみられる。(阿弥陀堂)
			●大河原峠や大石峠下から高地交通路を思わせる土器が出土。
			●打製の石包丁や紡錘車が使われる農業集落が発達。(阿弥陀堂)
			●濃尾系の土器移入がみられ，集落内に大型住居址が出現。(一本樹)

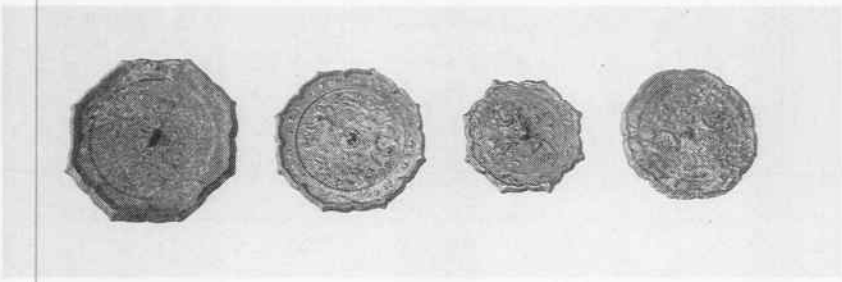
棚畑遺跡出土の土偶（茅野市尖石考古館蔵）

驚かせたのである。

公園化による遺跡保存の声や、学術調査のための調査範囲の拡大などもいわれたが、経済優先の風潮や工業団地造成の予定の動きの中でかき消されていった。

また昭和五十三年の調査以後に中央道建設工事のため、消滅していった宮川茅野の「御社宮司遺跡」からは、モミとみられる圧痕のついた一〇点ほどの土器が発見され（茅野市史上巻五十六頁、図二四四）、縄文時代晩期終末に、すでにコメが入っていたという驚くべき証拠を提供してくれた。これまで東日本への稲作の伝播は、弥生時代中期以降とみられていたのに、こんなにも早く、この地方にコメがもたらされていたということは、この地方の歴史研究にとってゆるがせにできない大変に重要な意義をもった遺跡として紹介されたのであった。

同じ道路関係で失われた重要遺跡としては、昭和五十七年に茅野有料道路建設のために発掘された、ちの塚原の「構井・阿弥陀堂遺跡」がある。弥生時代の大集落遺跡が存在するものと注目されていたが、その通りで、数多くの平安時代の住居址と共に、諏訪地方では初めての発見であったという珍しい壺棺墓や、四面もの八稜鏡など、貴重な資料が出土した。しかし、調査区域は道路敷地内に限定され分断されてしまった。そのため、せっかくの貴重な遺構の広がりが把握できず、考察も中途半端、せめて調査区域をもう少し拡大して、遺跡の規模や性格を面的に明らかにすることができたら、どれだけ考古学がこの地域の古代史解明に大きな貢献をしてくれたことになったか惜しまれてならない。



阿弥陀堂遺跡出土の八稜境（茅野市尖石考古館蔵　茅野市八ヶ岳総合博物館展示）

作成された年表や、市制施行記念としてまとめられた年表などが主要なものであろう。

諏訪はこのように年表作成の面で、かなり早い時期からの蓄積があり、それぞれの時代の史観が正直に年表に反映されていて参考になり、研究する者にとっては資料としてありがたい。しかし、同時に各時代における歴史の展開を、その社会的条件のもとでの底辺から、もう一度とらえ直してみる必要が、多々あるように思われてならない。

それが地域史であるという以上、その地域に即した視点をもって、その土地に展開された民衆の生産・生活・抵抗の歴史を統一的に把握して映し出すような観点を大事にしたい。

いくら中央での評価が高く、学問的価値をいわれても、それを住民のものにしていくという観点が希薄であっては、地域の中で歴史を再生したり、身近なものにしていくということはできないのではないか。

したがって、ここでは年表作成の地域性といったことや、また地域史研究のうえで、自分が突き当ったり、痛感させられていることの一端を、いささかの問題提起のつもりで試みさせていただきたいのである。

二、考古学による歴史復元の地域性

ここのところ、毎年のように目をみはるような考古学上の大発見・新発見があいつぎ、新聞・テレビで紹介されるたびに驚嘆させられるが、そのかげで調査後に多くの遺跡が破壊され、この地上から永遠に消滅している現実もまた直視しなければならない。

文化庁記念物課の資料によると、一昨年（一九八九年度）の発掘届出件数は全国で二五、〇〇〇余件、そのうち実際に発掘調査された実施件数は約九、〇〇〇件に達しているという。わが茅野市域だけをみても、教育委員会の調べで、昨年度は十一件の発掘、面積にして約二〇、〇〇〇㎡、「縄文の古里」といわれるこの大遺跡埋蔵地帯で調査員五人が、発掘調査と報告書のまとめに追われている実状である。

さらに、これらの発掘の九九・八％が開発を前提にした「緊急発掘」であり、「記録保存」だけで、遺跡が跡形もなく消えていっている状況は、茅野市も例外ではなく、いくつかの重要遺跡が遺物と記録だけを残して消えていった。最近では「縄文のビーナス」と全国的に注目され、平成元年に国の重要文化財に指定された大型土偶を出土した、米沢地区の「棚畑遺跡」も工場敷地の隅にわずか残るだけである。

土偶は、これまで出産儀礼にかかわる人間の生と死に関する呪術に使われたものとみられ、大多数が破片状態で出土するので、もともと壊される宿命のものと半ば定説化されていた。それが昭和六十一年の発掘調査で、ここからほぼ完型の状態で出土したのだから、全国的に大きな話題となり、研究者を

茅野市八ヶ岳総合博物館紀要１：10—20（1991）

地域史研究と年表作成の諸問題

藤森　明*

一、はじめに

最近、各地で刊行されている市町村史や集落史の類は大変なもので、私たちの周辺でも数多く刊行されている。

私は、それらを手にして、まず最初に目を通すところは、初めに掲げられている編別の「目次」であり、そして巻末に添付されている「年表」に注目する。

これらをひと通りみれば、おおよその内容についての見当はつくし、どの程度にその地域性をくみあげているかの状況も、よくわかるからである。

ところが年表というものは、調べたいと思う事項や年代が容易に引き出せることを目的に、読む人の便に供するためということであろうが、割に簡単に扱われている傾向がある。

しかし、年表作成を厳密に考えてみれば、この仕事は容易なことではなく、人類の出現から今日に至る歴史的発展の全過程を総合的に把握する立場に立って、年表という限られた時代区分の範囲内に簡略化し、集約しなければならないことが要求されているからである。

過去の膨大で多様な史実の中から取りあげるべき事項を選択し、捨てるものは捨てていかなければならない。

このことは、単に年表作成にあたってだけにとどまらず、全人類史の長い展開の中で、各時代の特徴や変化をどのようにとらえるかの歴史認識の問題になり、その歴史観にもかかわってくる基本問題である。

戦前は天皇や将軍を頂点とする統治権力の所在を中心に歴史をとらえる政治史的時代区分の考え方が主流であったが、戦後のめざましい研究の発展の中では社会経済史的時代区分によって社会機構の変化をとらえ、歴史を推進する主体としての民衆の役割の位置づけが重視されるようになった。

過去の先学たちが年表作成に当って苦心された諏訪地方の研究史のうえから見ても、昭和九年に小学国史教授用として作成された「諏訪史年表」、これをさらに改訂し解説付きにした昭和十三年再発行のもの、戦後は昭和四十九年の「諏訪郡史総合年表」があり、そして各市町村史（誌）刊行にともなって

らないのである。

おわりに

古文書講座で使用した文書を通して見ただけでも、古文書解読上の問題点は多くあり、ここですべてを尽くせない。

最後に、古文書におけるくずし字（行書・草書）というものは、千差万別にやたらにくずしたものではないということである。一つの文字について、くずし方はほぼ限られている。現代では自分勝手にくずしてしまうが、昔はほぼ一定のくずし方があった。だから「くずし字辞典」を作ることが可能なのである。昔の人は、そういうくずし字を寺子屋の時から、「読み・書き・そろばん」と言う通りに、もっぱら手本の通りに書いて覚えた。古文書には、自分勝手にくずした文字は皆無と言っていい位である。

明治の初期までの文書は、そういう人たちの書いたものなので、一定のくずし方によっている。明治も少し下がってくると、寺子屋で「書き」を習った人が段々いなくなって、自分勝手にくずすようになる。明治初期の毛筆で書かれた文書までは、いわゆる「古文書」と言える。一定のくずし方を習った人たちによって書かれた「古文書」は、こういう意味で、かえって近現代の、自分勝手にくずした文書より、くずし字については読み易いと言うことができる。

金釘流ということばがあるが、講座で使った史料の中にも、かなり乱雑に書かれた文書（第五回の古田山入会定書、第八回の伊勢道中日記・富士登山日記など）があっても、その文字はよく見れば、すべて一定のくずし方によるくずし字であることが分かる。

なお、蛇足であるが「古文書」は「コブンショ」でなく「コモンジョ」である。「口上書」は「コウジョウショ」でなく「コウジョウガキ」である。

＊茅野市八ヶ岳総合博物館専門委員（産業）

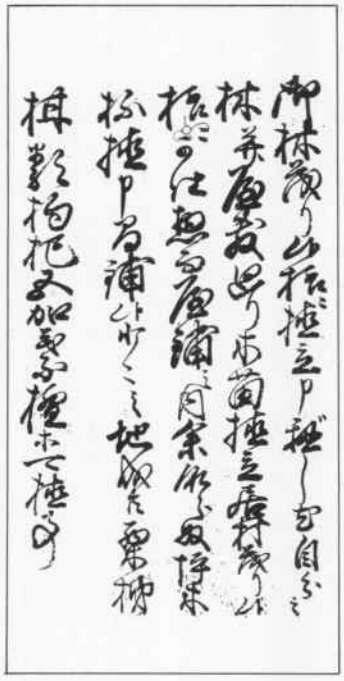
いるが、ここでは名詞ではなく、「いりあう」という動詞として用いている。

読み進めると「南は立道より、北奥野江ハ入合不相成由…」とある。「いりあいならず由」と読む。更に後の方に「…北拾式ヶ村者分ケ而入會ニ被仰付候…」「…是迄無隔入會草苅取候…」とある。前者は「いりあい」の名詞であり、後者は「いりあい」の動詞である。同回に使った寛政九年の古田山の定め帳は「古田山入合相談定書帳扣」とある。右の用法に見るように、「入相」「入合」「入會」のいずれをも使っており、「入相、入合」を「いりあい」と読む以上、「入會」も「いりあい」と読まなければならないのは明らかである。別の文書では「入逢」という文字を用いたものがあるが、これももちろん「いりあい」である。

現今、「にゅうかい」「にゅうかいざん」「にゅうかいする」などと言われているが、これは明治になって、なお年月が下ってから、使われるようになったものと思われる。古文書では「いりあい」「いりあう」であり、江戸戸時代以前から江戸時代を通して、かなり最近まで、「いりあい」で通って来たものである。

異体字・俗字・宛字・嘘字

普通の漢字の他に、異体字・俗字・宛字・嘘字などと言う文字がある。五人組御法度前書の第四十条に「…栗柿柑類…」と出ている。この「柿」の字は漢和辞典で見ると「柹と同じ、かき、俗に柿に作る」とある。「柿」の字の方が俗字であり、「柿・柹」が「かき」の本来の字であって、「柿」の項を見ると「柹に同じ」とある。現代では「柿」と書くが、昔の人は本来の文字「柿」を使っていたもので、他の古文書でも「柿」の字で出て来る。この文章の草書を楷書に戻す時に「柿」と書いては正しくないわけである。



天明九年の口上書、安永六年の口上書、寛政九年の口上書に出て来る「苅」の字は本来の漢字にはない文字で、漢和辞典で見ると「国字」としてある。意味は「刈に同じ、かる」とある。つまり、「苅」は「刈」の異体字であるが、古文書では常に「苅」の字を使っている。このような類の異体字・俗字・宛字・嘘字の問題は、講座で使用の文書の中に他にも出て来るが、ここでは省略する。古文書では、そのような文字を慣用している例が多くあり、それらは常用漢字にあてはま

厳密に言えば「拾箇年、拾个年」「何箇度、何个度」と書くべきであろう。

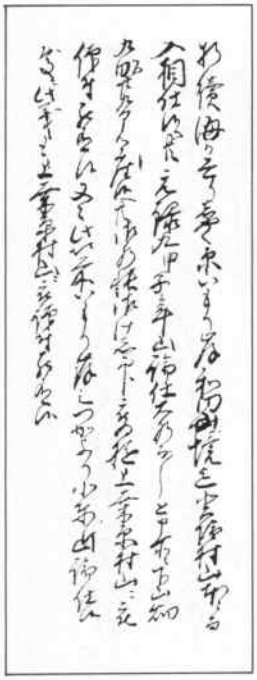
用語「絹」

「絹」の文字について。第三十一条に「…名主ハ妻子共ニ絹紬布木綿…」「惣而絹布之類…」と「絹」の文字が出て来る。使用した史料では、「絹」という草書であるから、元の楷書は「絹」であることは間違いはない。ところが、同じ五人組御法度前書でも別所蔵のものでは「絹」という草書体で書いてある。そこでこの文字を楷書に戻すと「絹」であると言われる。絹という文字は諸橋大漢和辞典にも出ていない。「絹」は「絹」でなかったと考えるのは正しくないと思われる。「絹」も「絹」をくずした草書なのであって楷書に戻せば一つの「絹」であるべきだと思われる。古文書講座で用いた文書では「絹」であったので問題はなかった。別所蔵の文書を用いると、この問題が出たところである。第三十五条に「…参詣…」の語が出てくる。この草書は「絹」であって、右側のつくりの書き方は右の「きぬ」の場合にそっくりである。このために「絹」の字も生じて来ることになる。

史料「山論文書」、用語「入會」

以上は、五人組御法度前書之事の文書に使われた語法や用語の例であるが、同じく講座に用いた山論関係文章の中から、別の事例を上げてみたい。「入会」の用語について。「入会」の読み方については、現今においては、「ニュウカイ」という言い方が一般に行われているようである。「いりあい」とは余り言わないようである。しかし広辞苑などで見ても、「にゅうかい」の項は、にゅうかい〔入会〕会に加入し会員となること、とあるだけである。「いりあい」の項に、いりあい「入会・入相・入合」一定地域の住民が特定の権利をもって一定の範囲の森林・原野または漁場に入り共同用益（木材・薪炭・まぐさなどの採取）すること、とある。「入会」は「いりあい」と読むことが正しいことは明らかである。

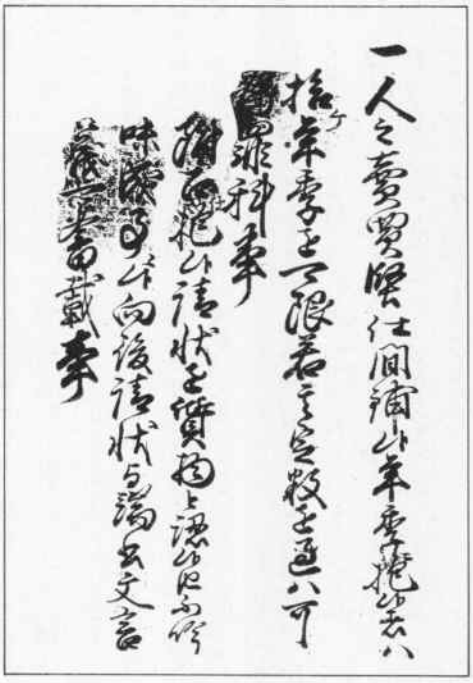
古文書講座で用いた限られた古文書だけでも、このことを知ることができる。第三回の天明九年の北大塩村からの検地願口上書に「…いもり沢峯和田境迠北大塩村山本ニ而入相仕候へ共」とある。「入相」と書いてあり、「いりあい」と読むべきは当然である。第六回の寛政九年の北十二か村からの原山争論口上書に「…坪之羽ト奥野之分ハ先不入會…」とある。「まず、いりあわず」と読む。「入會」という文字を使って



うまでもなく「か」と読む。この「ケ」の文字はどこから出たかについて、辞書によって見ると次のようである。

講談社日本語大辞典「カ」の項、カ〔个〕一つ一つ、ものを数えるに用いる、箇の略字。岩波広辞苑「か」の項、か〔箇・个・ケ〕（「ケ」の字は「个」からか）物を数えるのに用いる語。角川国語大辞典「か」の項、か〔箇・个・個〕数量を数える助数詞、「个」「個」は同字、「ケ」は「个」の代用。小学館日本語大辞典「か」の項、か〔箇・個・个〕漢語の数詞を付けて物事を数えるのに用いる語、漢籍ではこの文で語が切れる用法もあるが日本語としては切れる時は「こ」を用い漢語の名詞に続く時に「か」という、〔個・个〕は箇と同字、「ケ」は「个」から出たかなで「个」の代用として一時期よく用いられた。同辞典「け」の項、け〔け・ケ〕かたかなの「ケ」を物を数える「一カ年」「一コ」の「箇」に代用することがあり、近来は「一ケ」「二ケ」等を「イッケ」「ニケ」等と読むようにもなり、また「君ヶ代」「八ヶ岳」のように連体助詞の「が」にあてることもある。これらの「ケ」はもともと「箇」の略体「个」から出たもので、かたかなとは起源を異にするが字体としては区別がなくなっている。三省堂新漢和大辞典「个」の項、个〔カ・コ〕箇に同じ、かず、〔カイ〕介に同じ。

以上の如くであって、「ケ」を用いて「カ」と読む理由が明らかである。かたかなの「ケ」は「个」の代用として用いるものであることがはっきりしている。个をくずして書くと



「ケ」のようになる。古文書において、そこに書かれた「ケ」の文字は、かたかなのケであったか、个をくずしたケであったか。それは、昔の人は「个」をくずしたものとして「ケ」と書いたに違いないと思われる。かたかなのケだと考えるのは近代になってからのことであろう。

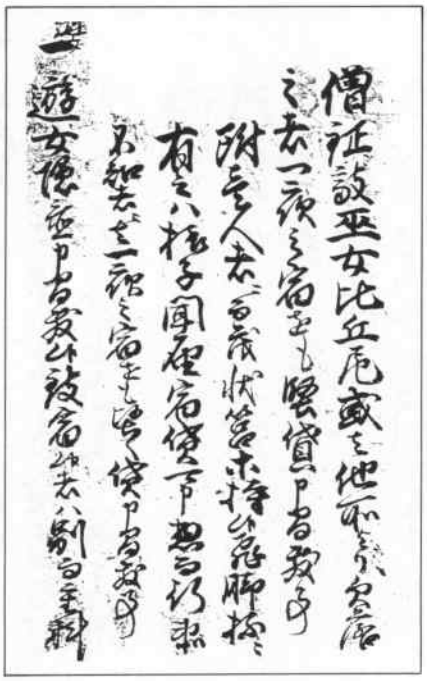
五人組御法度前書の末尾の所に「右五拾六箇条之御条目之趣…」と書いてある。これは元の文字「箇」を用いたもので、本来の書き方である。別の古文書の例であるが、芹箇沢村とか矢箇崎村または矢个崎村と書いた文書もある。これらのことは、「ケ」の本来は「箇」「个」であることを示している。五人組御法度前書の「拾ケ年」「何ケ度」を楷書に書き直すには、

可申」は「組み替え申すべく」と続けるのがよいだろう。この所は文意では切れるが、少し後へ行くと「力を副べし」とはっきり切れる所があり、朗読上は「組み替え申すべく…力を副えべし」と読むのがよいと思われる。そのあとの「可致相談……可受了簡」も「相談いたすべく…了簡を受けべし」がよいと思われる。「可受了簡」の後は十五字ばかりで終りになるが、「受けべし、……まじき事」で調子が締まる。「べし」か「べく」かは、その文章に依るものというべく、何れにしても、いつも「べし」でもなく、いつも「べく」でもなかったと思われる。

用語「ホ」

次に用語について。第四条「…其外備物ホ迮…」、第五条「…借金未進ホ致し…」、第八条「…状箱ホ持候飛脚抔ニ…」、第十四条「…村次送証文ホ有之ハ…」、第十八条「…田畑溝ホニ…」、第二十六条「…養子ホニ…」、第二十一条「…縫鹿子ホ入候…」、第二十四条「…仏事式祭礼ホ之義…」などの「ホ」はいうまでもなく「等」である。諸橋大漢和辞典によると、〔ホ〕という文字があり、音は「トウ」であり「等の俗字」であるとしている。訓は示されていない。これを古文書ではどう読んだか。

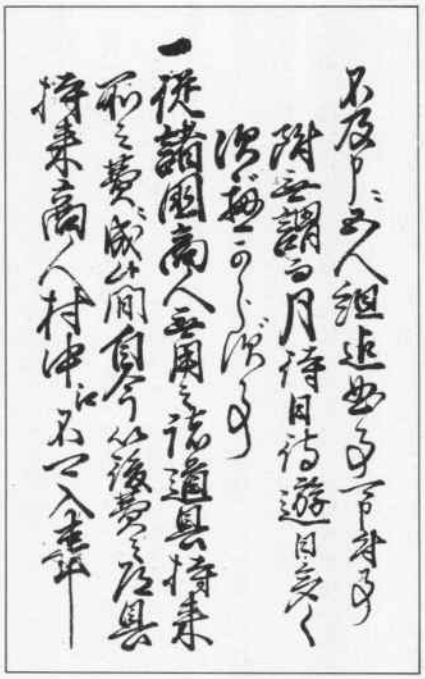
第八条で「状箱ホ持候飛脚抔ニ」と、二つの文字を使い分けている。「抔」は漢和辞典で見ると、音は「ホウ」で、訓は「など」である。「トウ」という読み方はない。第八条で使い分けたのは「ホ」は「トウ」と読み、「抔」は「など」と読んだものと思われる。第三十五条にも「…順礼抔に托付国見物のため…然共立願ホニ而…」とあり、「抔」と「ホ」を使い分けている。このことから、前述の何か条の「ホ」は「トウ」と読んだと思われる。しかし、「など」と読むことも行われていたであろう。「ら」と読む場合もあり、五人組御法度前書にはその用例はないが、「我ホ（われら）」として使った例は、他の古文書によく見られる。



用語「ヶ」

第二十一条「…拾ヶ年季を可限…」、第二十四条「拾ヶ年を限り…」、末尾の「…何ヶ度茂為読聞」などの「ヶ」はい

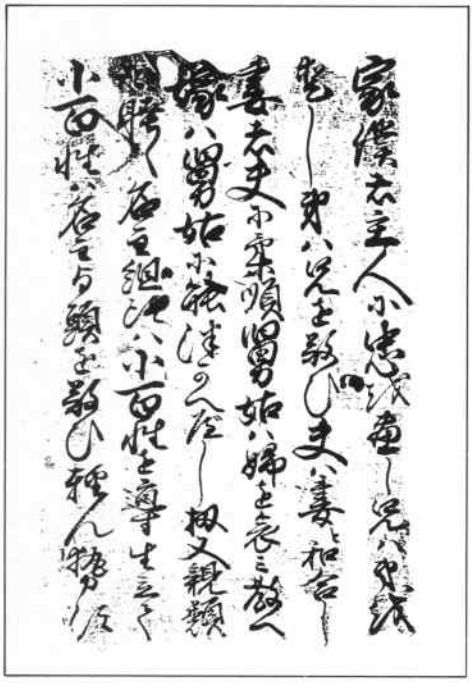
音の通りに、ひらがなで書いてある。第三十八条「…相定員数之外不可造事」は「造るべからず事」である。その他、第五十条「…油断不可仕事」は「油断仕るべからず事」である。



この語法は、候文の「候」を外した形になっている。「高値ニ不可仕候事」と書けば、「仕るべからず候事」と読むが、それから「候」を外すと「べからず事」となる。「…不可請取候事」は「請取るべからず候事」であるが、「候」を外すと「べからず事」となる。この語法も、庶民相手に使われたものを思われる。

語法「べし」と「べく」

第四条に「五人組之儀者……年々五人組を組替可申惣而五人組仲間……精入力を副べし……五人組心を合可致相談若五人組……名主与頭ニ申達可受了簡不依何事……自由仕間敷事」のように、文章の途中に「べし」「べく」が入る場所がある。どういう場合に「べし」と切り、どういう場合に「べく」と続けるかは一概には言えない。大体、文意の続き具合や朗読上の調子などによったものであろう。第四条の最初の「組替



れていたものと思われる。この語法でいくと、第三条「……不及難儀様ニ可申付事……」は「申しつくべき事」でなく「申しつけべき事」である。第四条「……致相談、精入、力を副べし」は「力をそうべし」でなく「力をそえべし」である。同条「……名主組頭ニ申達、可受了簡…」は「了簡をうけべし」であり、「…急度曲事可申付事」は「曲事申しつけべき事」である。

以下、この語法を挙げると、第五条「…可申付条…」は「申しつけべき条」、「…可任下知事」は「下知にまかせべき事」、第九条「…重科可申付事」は「重科申しつけべき事」、第十一条「…可受差図…」は「差図をうけべく」、「…曲事可申付事」は「曲事申しつけべき事」、第十七条「…急度可申出…」は「急度申しでべく」、第二十一条「…可書載事」は「書きのせべき事」、第二十三条「…越度可申付事」は「越度申しつけべき事」、第二十四条「…其田地可取上事」は「取りあげべき事」、第四十三条「…可申付候」は「申しつけべく候」、第四十五条「…名主より可申出…」は「申しでべく」、第四十九条「…可念入事」は「念いれべき事」などである。

右の語法は、活用形の命令形に「べし」が付いた形になっている。仕えよ→仕えべし、申し付けよ→申し付けべし、副えよ→副えべし、任せよ→任せべし、などである。しかし、この通りに行かないような場合もある。第六条「…堅可相守事」は「相守れべき事」では不自然で、「相守るべき事」がいいようだし、第十五条「…可申達…」も「申したっすべし」と普通に読む外ないようだ。

語法「べからず事」

第三十五条に「…無謂而月待日待遊日多くすべからず事」とある。これは漢文式に書くと「不」可」多事」か「多くす不」可事」である。「不可事」を普通に漢文式に読めば「べからざること」である。これを「べからず事」と書いてあるのは、そのように読んだということである。この語法でみると、第六条「…高値ニ不可仕事」は「高値に仕るべからず事」である。第十四条「…不慥成者不可請取事」は「請取るべからず事」である。第三十七条には「…私ニ執行すべからず事」と発

茅野市八ヶ岳総合博物館紀要１：２－９（1991）

古文書における語法と用語

細田貴助*

はじめに

平成元年十二月から、八ヶ岳総合博物館の古文書講座が始まった。不肖私が講師ということで。この講座の史料は、旧茅野市民俗資料館に所蔵され、現在は博物館所蔵になっているものである。その史料に表われた文章の語法と用語について考察してみたい。今更というような事もあるかも知れない。

史料「五人組御法度前書」

史料の一つに「五人組御法度前書之事」という古文書がある。江戸時代前期の承応年間（一六五二～五四）から、幕府によって「五人組帳」が出された。前書と請書とから成り、前半の前書が本文であり、五人組が遵守すべき法規を記載してある。後半の請書は、町村役人と五人組員が連名連判したものである。一部は領主に提出され、一部は町村に保管された。博物館所蔵の史料は、この五人組帳の前書である。享保年間（一七一六～三五）にかけて完成され、普通五〇か条前後から成る。毎月または年数回、町村役人が五人組寄合で読み聞かせて周知徹底を期し、寺子屋の教材としても用いられた。（以上、角川日本史辞典参照）

右のようないわれのあるのが我が「五人組御法度前書之事」である。五十六か条から成っている。まず、この史料の中から語法や用語を取り上げる。

語法「仕えべし」

第二条（原文は第何条とは言っていないが便宜上つける）に「……舅姑ハ婦（嫁）を哀ミ教へ嫁ハ舅姑に能つかへべし……」とある。これで発音ははっきりしている。「よくつかえべし」である。この所を漢文式に書けば「可レ仕」か「可レ事」である。これを読めば普通は「つかうべし」である。それを「つかへべし」と書いてあるのは、「可仕」と書いても「つかえべし」と読むということである。

この語法は、江戸時代には庶民相手の場合など一般に使わ

人文歴史部門

目次

めに館員の頭と胸と手と脚が館の隅々まで常時行き渡っていることが必要でありその努力が続けられている。

しかし保守管理の良さや踏襲による僅かな改善や、思いつきだけではこの有機体の望ましい成長は期待できない。成長の根源となる生命源が枯渇してしまうからである。この生命源にエネルギーを与え続けるのが館員のたゆみない研修であり、研究調査活動であり、資料の収集、整理、保存（現地保存を含む）の活動である。特に調査研究は教育活動と共に博物館の命脈を決する大事であって、もしこれが何らかの理由によりないがしろにされるとき、博物館の学問的基盤は貧弱になり、教育創出の源泉を失い、その結果この有機体の生命は枯渇し、展示は色あせ、講座・教室の内容は空疎となり博物館は巨大な廃墟になりかねない。そのために人的経済的な新たな行政措置が緊急に配慮されねばならない。

開館時の学問的・教育的源泉は、市内及び県下の数十名に及ぶ展示資料調査委員（後に展示専門委員）の人と研究成果に依存し、積極的な参画を得て茅野市にふさわしい博物館として発足した。現在では「生物分野に三、歴史民俗分野に三」の六名の博物館専門委員を委嘱し、調査研究の援助を頂く一方、教育環境の創出、講座の指導その他に主体的かつ積極的な支援を願っているが、源泉を豊かに確かにする一層の努力が今後の博物館運営の大事であることを肝に銘じておきたい。

さて開館二年半にしてようやく博物館紀要を編集することが出来た。この紀要を博物館では調査研究の記録としてだけでなく、出来るだけ実践の足跡をも含めた博物館活動の総合的な記録野帳として位置づけている。したがって公式な報告書の性格も様式も無く、また学術報告書としての体裁もなく、後日のための資料になるであろうものを雑多に収録する事にした。それはこの博物館の経営に直接関わる者の貴重な資料とし、それに参画、あるいは支援、あるいは特に関心をもつ方々の参考のための累積記録としたいと考えたからである。

紀要には博物館専門委員の細田貴助、藤森　明、阿部義男、野沢進之輔の四氏及び学芸員永富直子の研究調査等の記録が収録されている。四氏にはいずれも博物館の資料にと、ご無理を申し上げたものを快諾され優れた労作をお寄せ頂いた。心から感謝している。内容についてはもとより野帳的な性格のものとしてそれぞれとらわれない立場で自由に発表して頂いたものである。

平成三年三月

館長　田村和郎

創刊にあたって

じゅうたんの床に座り込みジオラマの動物たちと対話する子供たち。囲炉裏のある家の縁に腰を下ろし人生を回想する老人。エントランスホール・休憩室のゆったりとした空間に憩い明日へ生きる活力を蓄積している人々。広い芝生で山麓の四季の景観を愛でながらの家族ピクニック。ときには暮れなずむ八ヶ岳を背景に演奏者と交歓するミュージアムコンサート。あるいは、歴史に踏み入るひそかな楽しみを胸に古文書の解読に時を忘れ、野鳥や動物の生態に目を見張り、高山植物の美しさに魅せられ、民具に隠された先人の知恵の深さに驚嘆した講座・特別展。また一つの竹片から多用途の孫の手を創り出したり、自転車の分解や土鈴制作に熱中する遊学教室。博物館は、訪れた人々に、「茅野市に住みあるいは遊ぶ幸せが、そして人間であることが、少しずつ嬉しくなるような学習体験」、言い換えれば「人間として、今を生き、将来に生きていく根っこを養なう」生涯学習援助の一翼を懸命に担ってきたと言えるように思う。

博物館の他の学習施設と異なる特質は、常時、構造化された学習材による学習者の自主的学習を促す学習環境（常設展示）をそなえていること、及び博物館の持つ調査研究等の組織・施設設備やフィールドと資料を活用して、講座・教室や特別イベントなどを計画的に行うことが出来ることである。

さらに、その特質を充分に生かして、学習者がここに親しみ、それぞれの個性能力に応じて知見や感性を涵養し、学習の仕方や生涯学び続けることの楽しさを会得してくれることを願って、より良い学習環境を創出し学習を支援していく研究者であり助言者である組織を持っていることである。

こうしてみると博物館は、「ハードとソフトと人」とが有機的に絡み合った一つの大きな生命体で、人々がこの生命体に接し、包まれ、働き掛けると、それぞれの個性とグレイドに即した知性や人間的感性が育っていくような教育有機体であるように思う。

開館以来博物館は生涯学習の基礎センターとして館員力を合わせて着実な歩みをたどり、この教育有機体を良好に機能させて今後への基礎を作ってきたが、残された極めて重要な一つの課題を書き留めておきたい。

博物館が、学習者にとっていつでも新鮮で魅力的で確かな手応えのある教育有機体であるためには、有機体のどの構造部分もいつも生き生きとしていることが大事である。その何処かが病むと全体がみずみずしさを失ってしまう。そうならないた

紀　　要

創　刊　号

《人文歴史部門》

1991年3月20日

茅野市八ヶ岳総合博物館